

ハイスクールD×D ～転生した大導師～

尾尾

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

大十字九郎に敗れ外宇宙へと放逐された大導師マスターテリオン。
エセルドレーダと共に絶望の輪廻から解き放たれ外宇宙を漂っていたが気がつけば赤ん坊としてハイスクールD×Dの世界に転生していた。

ニトロプラス屈指のチートキャラであるマスター様によるハイスクールD×Dの世界での活躍にご期待下さい。

第20話	第19話	第18話	第17話	第16話	第15話	第14話	第13話	第12話	第11話	第10話	第9話	第8話	第6話	第4話	第3話	第2話	第1話
121	111	101	96	90	83	72	64	59	51	44	39	31	24	17	8	3	1

目次

第1話

〈冥界〉

「オギャー！オギャー！」

「ミーシャ！産まれたのか！」

「はあ、はあ。ええ、見てくださいエドガー。ほら？あなた譲りの綺麗な金の瞳の元気な赤ちゃんよ。」

（ツ！何だ！一体何が起こったのだ！）

つい先ほどまで最愛の伴侶であるエセルドレーダとともに宇宙で漂いながら永遠の時間を過ごしていたはずだったマスターテリオン。だがふと気がつけば何時の間にもやら若く美しい女性に抱かれ、その横からこれまた整った顔つきの男が此方のことを覗き込んだ。言葉を発しようとしても赤ん坊特有の泣き声にしかならず体を動かさうにも手足をバタバタさせる事しか出来ない。

（落ち着いてくださいマスター）

（その声はエセルドレーダか！これは一体どういう事だ。つい先ほどまで余達は宇宙にいたはず。それにお前はいったい何処にいるのだ）
（申し訳ありませんマスター。私も気づいたらこの状況でした。それと私は今マスターの中に居ます。契約しているというよりは宿っているという言葉が適切かもしれません）

（宿っているだど？という事だ。ナイアルラトホテップの仕業か？いやしかし奴は十字架九郎とアル・アジフの手によって……）

この不可解な自体を引き起こしたのはかの憎き邪神の仕業なのか、いくら考えても現時点でその答えが出るはずもない。それよりも今は目の前の男女の事だ。二人はまさに今が幸せの絶頂期であるかのような顔をしている。

「よし、お前の名前はアレイスターだ！元気に育てよ！」

「あら、良い名前ね。きつとこの子も貴方に似てかっこ良くなるわね。将来が楽しみだわ。」

マスターテリオンの顔を覗きながらそう楽しそうに会話する二人の名前はどうかやらミーシャとエドガーというらしい。そして恐ら

く会話の内容から二人の子供として生まれたという事が推測できた。
(余がこの平凡そうな二人の子供であるというのか！)

前世というべきなのは分からないが以前は邪神ヨグ・ソトースと人類最強の魔術師ネロとの間に生まれ、邪神に翻弄され続けた生涯を送ったマスターテリオンにとって誕生を喜んでいる幸せな両親とというのは全くの未知のことであった。

(何だ？急に眠気が……)

(マスター。いくらマスターといえども今のお姿は生まれたての赤ん坊です。警戒は私がしておりますのでどうぞご安心してお眠り下さい)

(ああ、任せたぞエセルドレーダ……)

「あああら、どうやらアレイスターはおねむの時間見たいだわ」

「うお！寝顔も可愛いじゃないか！アレイスター、よく寝てよく育つんだぞ」

そういうやいなやマスターテリオンは眠りに落ちて行く。

こうして大十字九郎の手によって邪神ナイアルラトホテツプの呪縛から解放されたマスターテリオンの新天地での生活が始まった。この世界はマスターテリオンにとって優しい世界なのか？それはまだ分からないが眠るマスターテリオンを見つめる両親の顔は慈愛に満ちあふれているのであった。

第2話

この世界にマスターテリオンが生まれ落ちて12年、分かったことといえばこの世界は以前とはまるで異なっているということだけだ。確かに地球という点は同じでありこの世界にも魔術、悪魔、天使、墮天使、そして神というものは存在していた。しかしその実態はかつての世界に比べれば脆弱なものである。神とは名ばかりで宇宙一つ破壊する力も持たない。かの邪神と比べるにもおこがましいほどちっぽけな存在、それがこの世界の神であった。

(マスター、そろそろお父上が迎えにくる時間です)
(もうそんな時間か……)

今はすっかり日課となった鍛錬の時間だ。いや、鍛錬というよりは力の確認というのが正しいかもしれない。この世界での父、エドガーは悪魔であり母、ミーシャは人間であった。つまりマスターテリオン、改めアレイスターは悪魔と人間のハーフとしてこの世界に生まれ落ちた。しかしどういふ訳か邪神の因子も未だ体の中に存在している。従って今のアレイスターの身体は半分が人間、四分の一が悪魔、残る四分の一が邪神といった割合で構成されていた。そして悪魔の血が新しく流れているせいなのか、かつての全盛期に比べればおよそ魔力は半分以下にまで低下し使用する事のできない術式もいくつか存在していた。ド・マリニーの時計などがその典型だ。それゆえ少しばかり不安定になった力と己の新しい身体の確認をしていたのだ。

それと同時にアレイスターはこの世界の魔術にも手を出していた。以前の世界では大導師を名乗る程には魔術の造詣が深かったアレイスターにとって、この世界の目新しい魔術は十分興味深いものだったのだ。

(お前にも窮屈な思いをさせるなエセルドレーダ)
(滅相もございませぬマスター。私の喜びはマスターと共にあること。何にも囚われずただ平和にマスターと共に過ごす、これ程の幸せはありません)

現在、わりかし満足している生活を送っていたアレイスターにとって、ただ一つだけ困った事があるとすればそれはエセルドレーダの事。どうにかして彼女を人型にしてやりたいのだが幾ら試していてもナコト写本として現れるのみであり開く事もできない。勿論リベル・レギスも召喚出来ないのだがあれはこの世界には過ぎた力であるので問題はない。しかしアレイスターは伴侶であるエセルドレーダの事だけはどうかしてやりたいと思っていたのだ。

「おーい！アレイスター！もう昼食の時間だぞ〜！」

今世でのアレイスターの父、エドガーが向こうから声を張り上げ走ってくる。

「今日も相変わらず派手にやったもんだなあってその本どうしたんだアレイスター？」

「ふむ、父には見せた事がなかったか。これは余の半身とも言えるべき存在、ナコト写本だ。昔は開く事が出来たのだがどういう訳か開かなくなってしまうてな」

「何かその本、物凄い気を感じるぞ。父さんバカだからよく分からないがただの本には見えないな。神器ってやつじゃないのか？」

「神器？何だそれは？」

「おお！アレイスターにも分からない事があつたんだな！父さん感激だよ！神器つてのは確か聖書の神が作った物で色々な効果がある魔道具みたいなものだったかな？本来は人間にしか宿らない筈だがきつとお前は母さんの血を受け継いでいるから神器を宿しているだろう。詳しい事は母さんに聞くといい。母さんも神器を持っているからな」

「ふむ、なるほど」

アレイスターは手の中のナコト写本を眺める。エドガーはこれを神器と言ったがアレイスターは内心、それを否定する。さらに、自分の相棒であるナコト写本がこの世界のちっぽけな神が創り出した物と一緒にされる事に苛立ちさえ感じるのだった。

「まあ！それじゃあアレイスターも神器を持っているのね！さすが私の子だわ！」

「とりあえず神器について詳しく教えて貰いたいのだが」

家に帰ると母が昼食の準備を終えアレイスター達の帰りを待っていた。母、ミーシエは神器の事を話すととても喜んでる様子でアレイスターの事を褒め抱きしめる。たったそれだけの事、普通の家族だったのならば当たり前の事だが今まで体験した事のない両親との触れ合いをアレイスターは嫌がる事なく受け入れるた。

「ええ、神器は聖書の神が作ったっていうのは知ってるのよね？そうね、先ず神器には色々な種類があるわ。純粹に武器として戦闘能力を持つもの、傷を癒したりするもの、はたまたまるで役に立たない物まで。きつと生み出した神ですら全ては把握していないんじゃないかしら。ちなみに私の神器は

白炎の双手、炎を生み出す神器よ。これがお料理にとっても便利なものよ！」

「母さんはこんな事言ってるが昔俺はそれに幾度となく焼かれたぞ。いま思い出しても身震いがする……」

「あらやだ！そんな事あったかしら？お母さん忘れちゃったわ」

この世界での両親はかつて敵対していたらしく何度も戦ったらしい。今の母の姿からは想像する事が出来ないが若気の至りというやつなのだろう、アレイスターははしゃぐ母を見ながらその様な事を考えていた。

「神器は人に様々な力を与えてくれるわ。それを悪用するもしないもその人次第。まあアレイスターにはそんな心配はいらないでしょうけどね。神器は人の思いに答える力よ。たとえばね、神器の中には神滅具と呼ばれる物があるわ。それらは人の身でありながら神をも殺す事が出来ると言われているのよ。人間の可能性は無限大ってやつね」

人の身でありながら神をも殺す……かつて大十字九郎がなし遂げた事だ。人間の可能性――それはアレイスター自身が一番良く分

かっていることであつた。

「アレイスターは自分の神器がどういった物か分かっているのかしら？」

「ああ、だがそれを教える事は出来ない」

「そう、アレイスターがそういうのならそれでいいわ。きっと貴方には私たちには思いも寄らない考えがあるのでしよう。貴方は昔からそうだったわ」

「母よ、感謝する」

両親もやはり何処か違和感を感じていたのだろう。それも無理はない。しかしそれを受け入れ自分を愛し育ててくれる両親の事をアレイスターは愛おしく思い始めていた。

「今日は実は父さんからも話があるんだ。アレイスターももう12歳になつただろう？実はルシファー様から王都の学校に入学する許可が貰えたんだ！アレイスター、学校に興味はないか？」

どうやらアレイスターへ王都の学校への誘いの様だ。しかし王都の学校はソロモン72柱のような貴族達が通う学校である。本来父の悪魔としての階級はソロモン72柱以外の家名すらない有象無象の一悪魔。その様な平民では全く縁のないところであるはずだった。しかし父であるエドガーは己の武力を持ってその力を示し魔王ルシファーの眷属に選ばれた唯一の平民悪魔だ。どうやらアレイスターの事を聞いた魔王ルシファーが特別に王都の学校に通う許可を出したようであつた。

「どうだアレイスター？お前にも同年代の友達がいってもいいんじゃないか？」

「でもあなた、ただでさえハーフなのに平民のアレイスターが王都の学校なんかに通つたら虐められてしまうんじゃないかしら？私心配だわ！」

「おいおい、ミーシャ馬鹿な事いうな。よく考えろよ。三歳の頃に親子のスキンシップのキャッチボールで危うく俺を爆散させる様なやつだぞ。そんな心配はいらないわ」

「……………それもそうね」

母が反対しようとするが一瞬で父に論破される。確かにアレイスターは父との初めてのキャッチボールにて、いささか力を入れず過ぎてしまった事があった。エドガーが必死に避けなければきっと死んでいたに違いない威力で球を投げたのだ。

後日、アレイスターはこれをグラウンドマスターたる余の一生の不覚である、と語っている。

「それに王都には色んな書物があるぞ。きっとお前の知らない事が沢山待っているだろう」

未知が待っていると聞けばふつつつと興味が湧いてくる。ここ数年でアレイスターは家にある魔道書は読み尽くしてしまっていた。更なる知識を得るならば王都の学校へ行くのが一番の方法なのは明白だった。

（王都へへ行けばエセルドレーダを召喚する方法も分かるかも知れんな）

（マスター……）

「父よ、決めたぞ。余は王都の学校へと行こうと思う」

「お！本当か！いやーこれでアレイスターが断つたりしたら俺が気まづくなるからよかったよ」

「アレイスターがそう決めたなら私は何も言わないわ。貴方は貴方が思う道を行きなさい」

「よし！そうとなったら早速準備だ！入学式は来月にあるから急いで色々揃えないとな」

学校へと通うのなら必要となる物は色々ある。両親は早速準備のために動き出そうとしていた。

（さあエセルドレーダ、来月からはまた新たな生活が始まるぞ）

（イエス、マスター。マスターと共になら何処へでも）

冥界の王都の学校、そこにはどんな未知が待っているのだろうか。柄にもなくアレイスターは期待に胸を膨らみますのであった。

第3話

あれから一月が経ち、今日はいよいよルシファード王立学院の入学式だ。

(ここが学校という物なのだな)

(イエス、マスター)

現在入学式の真っ最中であり魔王ルシファアが壇上で話をして
いる。この学院はルシファアが魔王と兼業で学院長を務めているら
しい。ルシファアが出てきた瞬間に式場の空気がピシッと引き締ま
る。教師達からはルシファアの事を崇拜していることがよく感じら
れるし生徒も羨望の眼差しで壇上を見つめている。アレイスターの
隣の席で先程まで居眠りをしていた生徒も何時の間にか起きてい
ようだった。

(ほう、あれが余の父の王、魔王ルシファアか。力はさて置き人の上に
立つだけの人望はある様だ)

(イエス、マスター。しかし所詮はただの悪魔、マスターの障害とはな
り得ません)

(ふっ、その言い方では余が何か企んでいる様に聞こえるではないか)

(いえーその様なつもりは！)

(ふふ、そう謝らなくてもよい。今はただこの世界を満喫するのみよ)

アレイスターがエセルドレーダと念話をしているうちにどうや
ら入学式も終わった様だ。ルシファアが話の終わりにアレイスター
の方を見てきたが大方自らの眷属の息子になるのだろう。アレ
イスターは特にそれを気にすることはなかった。

本日の予定は終了となりとりあえずここで解散となっていた。
どうやら授業などが始まるのは明日かららしい。学院の暮らしは寮
生活なのでとりあえずアレイスターは寮へと向かうのだった。

「なるほど、ここが学院寮か」

アレイスターの目の前には何処の高級ホテルかと見間違えほどの建物がそびえ立っている。学校の寮としては些か不釣り合いだが貴族の子供たちが住むと考えると考えれば妥当なところなのだろう。学院のパンフレットには寮は二人部屋であると記載されていた。しかしこの分だと二人部屋だとしても十分な広さを確保できることが伺える。「失礼する。今日から同室になったものだ。これからよろしく頼む」

アレイスターは自室のドアをノックし中の者の声をかけた。しかし、中からは返事が帰ってこない。

(マスターの呼び掛けに答えないなど無礼千万！私が断罪して差し上げましょう！)

(落ち着けエセルドレーダ。単にまだ到着していないだけかもしれない)

エセルドレーダが憤慨しているがどうやら同室の者は留守の様である。なので先に部屋に入らせてもらおうとアレイスターはドアを開け部屋に入った。

部屋の中は何とも殺風景な光景が広がっている。設備は机が二つとベッドが二つ、そして収納スペースのみという実に簡素な物であった。しかし、流石と言うべきか机とベッドは最高級品である。恐らく他の家具は入居者が持参する物なのだろう。

「ZZZ……」

(なっ!!マスターの呼び掛けに答えずあまつさえ眠っているとは!!!もう許せん!)

(まあそういきり立つな)

二つあるベッドの片方から寝息が聞こえてきた。よく見れば布団が盛り上がっている。めくってみれば入学式の時隣の席に座っていた生徒が眠りこけているのがアレイスターの目に飛び込んできた。(この者は入学式でも居眠りをしていただろう。恐らくこういう性分なのだ。ほうつといてやれ)

(イエス、マスター……)

エセルドレーダは不服そうにだが従う。エセルドレーダのこの

忠誠心は有難いがアレイスターはもう少し余裕を持ってもいいのではないかと思っていた。

「取り敢えず配付された教科書でもみてみるか」

アレイスターは手持ち無沙汰になったため、おもむろに教科書を手にとつて眺め始めた。学院の授業は魔術学、戦闘学、貴族の作法など多岐にわたるため教科書も様々である。アレイスターにとつてはどれ一つとっても中々に興味深いものであった。

「ん〜あれ〜？誰かいるの〜？」

「む、ようやく起きたか」

そうこうしているうちに眠っていた同室の者が起きたようだ。まだ完全に起きていないのか寝ぼけた様な声を出している。

「今日から同室になったアレイスターだ。あいにくと貴族ではないので家名はないがよろしく頼む」

「うん、よろしく〜 僕はファルビウム・グラシヤラボラスだよ〜zzz」

挨拶して名前を言ったかと思えばファルビウムはまたすぐに眠り始めた。

「なかなかマイペースな者の様だな。しかしグラシヤラボラス家のものだったのか」

グラシヤラボラス家はソロモン72柱第25位、れっきとした貴族である。ファルビウムが貴族ではないアレイスターの事を見下す様な悪魔でなかった事は幸運であった。もしそうであったのなら良くて洗脳、最悪宇宙の塵になつていたのである。

ファルビウムが再び寝始めた後もアレイスターはパラパラと教科書を捲る。ふと気がつけばもう夜もかなり更けていた。

「明日から本格的に学院が始まるからな。余もそろそろ寝ておくか」

本来睡眠など必要ないのだが一度習慣になつてしまえば身体は切り替わるものである。今のアレイスターは夜はしっかりと寝て早起きするという健康的な生活をおくっていた。

備え付けられたベッドへと横たわる。さすが最高級品の事だけはある。アレイスターは全身が柔らかな羽に包まれた様に感じた。

家のベッドとは比べ物にならない、そんな事を考えながらアレイスターは眠りに落ちるのだった。

◇

「む、朝か」

目を覚まし、ベッドからむくりと身体を起こす。やはりベッドは素晴らしくアレイスターにとつてもかなり快適な使い心地であった。寮全体が慌ただしくなり始める。もう後30分もすれば朝のホームルームが始まるだろう。

「ファルビウム起きよ、もう朝だ。今日から学院だぞ」

「うーん、僕はめんどくさいからサボるよ」

ファルビウムに声を掛けるが一向に起きる気配はない。どうやらファルビウムは睡眠魔ではなくなったあのめんどくさがりの様だ。

「しよがあるまい。教室へは余が連れて行こう」

アレイスターが魔力を練り浮遊術式をファルビウムに発動させる。するとファルビウムが毛布に包まれたまま宙に浮かび上がった。

「うわー、これは便利だね。明日から毎日これで頼むよ」

ファルビウムは気に入ったのかご機嫌な様子でフワフワと浮いている。

「それでは教室へと向かうとしよう」

そのまま転移術式を発動させ二人は教室へと転移するのだった。

◇

教室へと二人が転移をすると教室内が一瞬にして静まり返る。

「ふむ、皆のものどうかしたのか？」

クラスメイトにそう問いかけるが反応が帰ってくる事はない。ファルビウムは既に空中で毛布に包まり寝始めている。すると赤髪の青年がアレイスターに話しかけてきた。

「学内は転移が出来ないはずだから君が教室に転移してきたのを見て

驚いているんだよ」

「なるほど、して貴公は？」

「僕はサーゼクス・グレモリー。グレモリー家の長男だ」

「ああ、余はアレイスター。家名はない。これからよろしく頼む」

アレイスターが名乗ったところで教室が一瞬湧いた。サーゼクスもそうか、君がとつぶやいている。やはり貴族でないというのは珍しいのであろう。大半の者が興味深そうな、また見下すような視線でアレイスターの事を見ている。

「皆さん、ホームルームを始めますよ」

そこへメガネを掛けた人の良さそうな男が教室へ入ってきた。恐らくこの男がこのクラスの担任なのであろう。生徒たちは教師を見るや否や、いそいで自分の席に着いた。

「皆さんおはよう御座います。今日から皆さんの担任を務めさせて貰いますニコル・ハーゲンティです」

ニコル教諭が壇上に立ち自己紹介をする。ハーゲンティといえばソロモン72柱第48位、やはりこの学院では教師もそれ相応の家柄を持つものがつとめているようだ。

「この学園は立派な悪魔として相応しい力、知恵、振る舞いを身につけて貰います。ぜひ同じクラスメイトの仲間たちと切磋琢磨して将来立派な悪魔になって貰いたいと私は考えています。本日の予定は皆さんの力量を把握するための筆記テストと模擬戦です。さあ、いきなりですがまずは筆記テストを始めますよ」

そう言うとニコル教諭はテストを配り始める。内容を見れば魔術の知識、ソロモン72柱、礼儀作法などの様である。アレイスターの様に長い時を過ごしていればある程度の知識は着くというものだ。開始五分ほどでアレイスターはさっさと終わらせた。チラリとファルビウムの方を見てみれば案の定眠っている。しかしどうやらテストはしつかり終わらせている様子だ。ファルビウムは存外優秀な奴なのかもしれない、余った時間でアレイスターはそんな事を考えていた。

「はい、そこまでです。次は模擬戦に移ります。今から20分後に開

始しますのでそれまでに運動場に集合しておいてください」

次は模擬戦である。この学院の生徒はアレイスターを除いて全て貴族で構成されている。貴族の悪魔は変わった力を持つ家が多かった。なので恐らく模擬戦でもその家柄特有の様々な力を見る事ができるだろう。アレイスターはそれを楽しみにしながら運動場へ向かうのだった。

◇

時間になるとニコル教諭が二人ずつ名前を呼び始めた。どうやら一対一の模擬戦の様である。

「ルールは相手が降参するか私が止めるまで。フェニックスの涙があるのでたとえ大怪我を負ってしまったても大丈夫なので安心してください。この模擬戦は皆さんの現在の力量を測るものです。なので相手を殺さない限りは全力で行ってください」

教師の合図と共に次々と模擬戦が始まる。しかしまだまだ若い悪魔ばかりなので、ただ魔力弾をぶつけ合ったりするだけの大して見応えの無い試合ばかりが行われていく。本人達は真剣なのだろうがアレイスターにしてみれば子供のお遊びでしかない。

(随分低レベルな戦いですねマスター。見る価値もありません)
(そう言ってやるなエセルドレーダ)

アレイスターも確かにエセルドレーダの気持ちも分からない事は無かった。少しがっかりしつつもファルビウムの方を向いて見れば、既にファルビウムは試合を棄権し木陰で寝入っていた。

数分後、サーゼクスの名前が呼ばれた。どうやら次の試合はサーゼクスらしい。サーゼクスは恐らく他の者とは違うであろう、そう感じていたアレイスターは期待しつつサーゼクスの試合を見つめる。

試合の開始と共にサーゼクスが魔力弾を放つが相手はそれをよける。しかし外れた魔力弾が運動場の壁を大きく削り取った。消滅の魔力だ。それは本来、バアル家特有の力、サーゼクスの母はバアル家出身なのでサーゼクスがその力を引き継いで生まれたのだ。ここ

にきて初めてアレイスターの興味を引く力であった。それを見た相手はその威力に戦意喪失している。どうやらそのまま降参したようだ。恐らくこのクラスではサーゼクスが最も強いのだろう。相手の不甲斐なきに不満を抱きつつもアレイスターは笑みを浮かべるのだった。

◇

「次！マルコ・マルファスとアレイスター！」

「ふむ、ようやく余の番か」

「お前がアレイスターか。この学院はお前みたいな平民がいて良いような場所じゃないんだよ。どうせ親に頼んで無理やりいれてもらったんだろう!!俺が勝ったらこの学院から出ていくんだな！」

「マルコ・マルファスといったか？貴様の様な存在は既知である。つまらん、実につまらんな」

「なっ!!」

「二人とも！早く準備をしなさい！」

マルコはアレイスターの眼中には全く入っていないかった。しかしエセルドレーダが念話で怒声を挙げている。

（あの無礼者には一切の容赦は入りません。ハイパーボリアゼロドライブを撃ち込んであげましょう）

（そんなもの撃つたら冥界その物がなくなってしまうだろう。それにあれはリベル・レギスがないと撃てん）

「それでは試合開始！」

「くたばれこの平民がーッ!!!」

マルコが開始の合図と共に大量の魔力弾を放つ。そしてそのままアレイスターへと命中し爆音と共に大量の土煙を巻き上げた。

「はははー！どうだ！平民なんかがここに来るからいけな「もう終わりか？」はっ！」

土煙が収まるとそこにはまるで何もなかったかのようにアレイスターが佇んでいた。

「やはり貴様はつまらん。あれだけ大言をはいた癖にこれだけの攻撃しか出来ないのか」

「な、な、なんで!?!」

「もうよい、早々に去ね」

「ギャー!!!」

アレイスターが指を鳴らすとマルコの影がまるで生きているように動きだしマルコの四肢を切断する。そしてそのまま胴体を串刺しにした。

「な!?!お、終わりです!もうやめなさいアレイスター!!!」

再びアレイスターが指を鳴らすとマルコを串刺しにしていた影が元に戻りマルコがドサツと地面に落ちた。慌てて教師が近づきフェニックスの涙を振りかけるが損傷が大き過ぎるせいかなり効果が見受けられない。

「ふむ、フェニックスの涙も存外たいしたことがないな」

「呑気にそんな事を言っている場合ではありません!!!貴方が引き起こした事なのですよ!!!」

「そう騒がなくても大丈夫だニコル教諭。これを治せば良いのだろう?」

アレイスターはそう言うときまた指を鳴らす。すると一瞬マルコを光が包む。光が収まるとそこには気絶した五体満足のマルコの姿があった。

「これで良いのだろうか?」

「あ、ああ……大丈夫です……」

ニコルはフェニックスの涙を持ってしても治らなかったマルコの傷をアレイスターが一瞬で治したのを見て呆然とする。殺す以外なら何でも良いといったのは自分である、マルコが無事だった以上ニコルはアレイスターを叱ることはできなかった。

マルコを治療したアレイスターはファルビウムの元へと歩みを進める。先程の惨状のせいかクラスメイト達は次々にアレイスターへと道を開けている。クラスメイト達はかなり怯えているようであった。そこへただ一人、アレイスターへと声をかける者がいた。サーゼ

クス・グレモリーである。

「今のは少しやり過ぎじゃないかな？アレイスター」

「やり過ぎ？あれがか？」

サーゼクスが少々怒気を含めながら問い詰めるがアレイスターは心底理解できないといった表情を浮かべる。

（あれはやり過ぎだったか？エセルドレーダ）

（いえ、全くそのようなことはありませんマスター。邪神の幻覚を見せて精神崩壊させてもまだ優しいぐらいです）

アレイスターはエセルドレーダにも尋ねるが当然と言ったような返答が返ってくる。

「四肢を切断する必要はなかっただろう」

「なるほど……あれはやり過ぎだったのか。すまん、次からは気をつけよう」

「え？あ、ああ。そうしてくれ」

サーゼクスとしてはもしかしたらアレイスターと事を構える事になるかもしれないと思っていたがアレイスターがすぐに謝ったので呆氣にとられる。アレイスターとしても常々以前と同じ感覚ではいけないと考えていたので素直にサーゼクスの言葉に従うのであった。

◇

放課後、アレイスターは学院長に呼び出されていた。十中八九模擬戦の事だろう。

「アレイスター、只今到着した。入室許可をもらおう」

「おう、入れや」

無駄に豪華な扉の奥から魔王ルシファアの声が聞こえる。大導師マスターテリオンと悪魔の王、魔王との会合が今始まるのだった。

第4話

部屋に入ると魔王ルシファーが椅子に座りアレイスターのことを待ち構えていた。横には秘書であろうか？一人の悪魔が立っている。

「よう、こうやって会うのは始めてだな。俺が魔王ルシファーだ。いきなりだが何で呼ばれたかは分かってるよな？」

「ああ、大方今日の模擬戦の事であろう」

「貴様！魔王に対してなんたる口の利き方だ！これだから平民は！」

秘書が無礼だと絶叫する。どうやらこの悪魔は典型的な選民思考の持ち主である様だ。それを聞いたアレイスターは鬱陶しそうに秘書の方に目を向けた。

「今は余と魔王との会合である。部外者は黙っててもらおうか」「っ!!」

アレイスターと秘書の目が合う。ただそれだけでまるで心臓を握り潰された様な感覚が秘書の全身を襲った。身体は動かず、呼吸もできず、一言も言葉を発する事が出来ない。まるでアレイスターに全てを支配されているようであった。

「そこらへんにしといてくれないか？」

「貴重な語らいを外野に邪魔されたくないのにな。なに、特に害はない。少々静かにしてもらっただけだ」

見兼ねたルシファーが秘書の解放を求めるがアレイスターはそれに取り合わない。ルシファーも害が無いのならば、と納得する。どうやらルシファーも余計な邪魔をされたくないと考えていた様子だ。秘書が絶望の表情でルシファーのことを見ているが二人はこれを華麗にスルーする。

「ちよいとばかりヤンチャをし過ぎたらしいな？」

「どうやら余と他の者との感覚がずれていたらしくてな。他の者からしたらやり過ぎであったらしい」

ルシフアーはアレイスターの言葉に苦笑する。

「あの後あるクラスメイトにたしなめられてな。次からは気をつけよう」

「いや、分かっているなら良いんだ。相手も多少非があるとも聞いているしな。ただお前さんは貴族達にはよく思われていない。おそらくそれはこれからも変わる事はないだろう」

俺が無理矢理お前さんを入学されたせいでもあるんだけどな、とルシフアーが付け加えた。

「有象無象がどうしようが余には関係がないな。所詮弱者の遠吠えよ」

「ははっ、そうか。お前さんがそう言うなら俺からは何も言わんさ」

ルシフアーはアレイスターの言葉を聞いて笑う。アレイスターの言葉には絶対的な自信と有無を言わさぬ凄みがあった。

それからはたわいの無い会話が続く。父エドガーのこと、魔術のこと、etc etc

それ等はアレイスターにとって久方ぶりに満足のいく会話であった。

◇

「それではそろそろ余は失礼するでしょう」

「そうか。アレイスター、まだ学院は始まったばかり。俺はこの学院の長としてお前が有意義な時間を過ごすことを願ってるよ」

魔王との会合が終わりアレイスターは学院長室から退出する。その瞬間今までピクリとも動かなかった秘書が崩れ落ちた。

「おーい、大丈夫かー?」

ルシフアーが秘書に安否の確認をするが当の秘書は体内に酸素をいれることに必死で返答する事が出来ない。

「あーあー、こりやダメだな。しっかしエドガーから聞いてたがぁりやとんでも無いガキだわ」

ルシフアーは悪魔の中で最も強いという自負があった。しかし

今日、それは間違いだという事を認識させられた。あれには逆立ちしてもかかないそうにない。

願わくばアレイスターが悪魔の敵にならんことを、ルシファーはそう思いながら椅子に深くもたれ掛かり酷く凝り固まった身体を伸ばすのであった。

◇

それから一ヶ月、アレイスターを見下すような目をするものは誰もいなくなっていた。皆、アレイスターを恐れているのだ。無理もない、誰だつて四肢を切断されたり串刺しになんかなりたく無いのだ。あれから模擬戦も数回行われたがアレイスターの相手に選ばれた者は皆、頼むからアレイスターの相手だけは勘弁してくれと教師へ泣きついていた。

その結果アレイスターへと話し掛ける者はファルビウム、サーゼクス、そしてサーゼクスの友であるらしいアジュカ・アスタロトの三人のみとなっていた。もとよりその様な事を気にしないアレイスターは毎日授業を受け、新たな魔術の知識を得る為に図書館にこもるという日々を繰り返していた。

そして本日もまた授業が終わり図書室へと向かう途中であった。いつも通り魔術書を手に取り席に座る。ほとんどの貴族の悪魔達というものは自らの生まれ持った力に酔いしれ努力をするという考えを持っていない。なので図書室を他に利用する者などおらずいつもアレイスターの独占状態であった。(もちろんアレイスターに近づきたがるものが居ないというのも理由の一つではあるが)

しばらく読み進めていると扉が開く音が聞こえた。目線をそちらの方へと向けると目を涙で赤く腫らした一人の少女が目に入る。なにやら右手にボロボロの本の様な物を持っているようだ。少女もアレイスターの存在に気付き一瞬驚いた様な顔をするがアレイスターから最も遠い椅子へと座るとまた泣き始める。

少女の容姿は紛れもなく美少女であった。普通の男であったの

なら間違いないその少女の事を慰めたりしていただろう。しかし今ここにいるのは大導師マスターテリオンである。エセルドレーダな話は別だが、見ず知らずの少女の事など気に掛けるぐらいなら魔道書を読み進める事を優先する男だ。

図書室にはアレイスターの本を捲る音と少女の嗚咽のみが響き渡っていた。

(あの少女はいささか読書の邪魔であるな)

(ならばあの小娘の存在を排除いたしますマスター)

(エセルドレーダ、すぐそうやって物騒な手段に出るでない)

少女の事を排除しようとするエセルドレーダに若干の頭痛を感じる。人型になれないことよってストレスが溜まっているのだろうか。アレイスターはこの世界に生まれてからエセルドレーダは少々好戦的になつている気がした。

「そこの少女よ、そう貴公だ。貴公しか居ないであろう」

少女は始め自分が呼ばれていると気づかなかつたのか辺りを見回す。その顔はいまだ涙でぐしゃぐしゃになつていた。

「貴公は何故そんなに泣いているのだ。正直読書の迷惑なのだが」
「っ!!」

アレイスターの辛辣な言葉にまた少女は泣きそうになる。

その時アレイスターの目に少女が大事そうに抱えているポロボロの本が目に入った。

「何だそのゴミのようなものは？」

「ご、ごみじゃない！」

少女が始めて声を荒げた。正直誰が見てもゴミにしか見えないが少女にとっては大事な物なのであろう。

「それが直つたらここを出て行くと言うのなら余がそれを直してやろう」

「え？本当!？」

アレイスターの言葉に少女が顔が明るくなる。

アレイスターが頷き指を鳴らす。するとまるでビデオの逆再生のように本が元の姿に戻り始めた。時間にしてわずか数秒。どう見

てもゴミだったそれはまるで買ってきたばかりの新品と遜色ない姿になっていた。

「嘘……本当に戻っちゃった……」

少女は目の前の事が信じられないのか目を丸くしている。

「ふむ、何だこれは？」

「あつ！ダメー！」

アレイスターが復元された本を手にとった。少女は慌ててそれを止めようとするが既に本はアレイスターの手の中にある。少女の顔が再び絶望感に見舞われる。その本の表紙には小さな女の子が豪華な服を着てなにやらステッキの様な物を持っている絵が書かれていた。タイトルは魔法少女リリカルさん、と書かれている。

「これは何だ？」

「えっ！あの……」

アレイスターの知識の中にはこれに該当するものがなかった。単純に好奇心として少女に問う。

「これは何だと聞いている」

「えっ、ま、魔法少女……」

「魔法少女？魔法をつかう少女という事か」

アレイスターは魔法少女リリカルさんをペラペラとめくり始めた。

（魔法を使う少女が魔法少女ならエセルドレーダも魔法少女であるな。また人型になれたらこのような服をきてみるか？）

（イエス、マスター。マスターが望むのなら）

アレイスターとエセルドレーダは念話で以前の世界の者が聞いたら確実に嘔き出すであろう会話を繰り返す。そんな中おらずと少女が喋り始めた。その顔は希望半分、恐れ半分といった様子だ。

「あの…… 私がそんなの持っていて笑わないの？」

「何故笑う必要がある」

「だってもうそんなの見るような年齢じゃないし……」

「貴公はこの様なものが好きなのだろうか？何を恥じる必要がある。」

堂々と好きと言えば良いではないか」

「そうかな……」

「しかしこれはなかなか面白いな。この様な魔法もあるのか」

「え！それ、さたんちゃんのスぺースライトブレイカー!? 本物!? 嘘！
すごい！」

アレイスターは本の中で主人公が使っている魔法をその場で再現する。

「ねえねえ！私もそれ出来るかな？」

「ふむ、まあ練習すれば出来るのではないか？」

先程までの泣き顔はどこへやら、一転して興奮した様子で少女はアレイスターにその魔法を教えて欲しいとせがみ始めた。

「貴公は他にもこの様な本を持つてるのか？」

「うん。好きだからいっぱいあるけど」

「ならばその本を余に貸し出せ。その代わり余が本に載っている魔法を教えてやろう」

「本当!? じゃあ明日早速持ってくるね！あと私は貴公じゃなくてセラフォール、セラフォール・シトリーだよ！セラって呼んで欲しいな！」

「セラか、了解した。」

「あ……でも学院では私に話し掛けない方がいいかも……」

アレイスターがセラと呼ぶとセラフォールは万円の笑みを浮かべる。しかしすぐに悲しそうな顔をしてそう言った。

「何故かは知らんが余には関係がないな。余を縛りたければ邪神でも連れてくる事だ」

「で、でもしたらアレイくんまであいつらに……」

「あいつら？」

セラフォールは一瞬口を閉ざすが数秒してポツポツと話し始めた。

「私ね、虐められてるの。その年になって魔法少女なんて変だつて…… 今日もこの本あいつらにやられちゃったの…… だからアレイくんも私と一緒にいたら巻き添え食らっちゃうよ……」

「ふむ、その様なクズ共に余の行動を制限される謂れはないな。余は余の好きな時に好きな事をするのだ。それにきつとセラの虐めも明日にはなくなるだろう」

「それって……」

「さて、そろそろ夕食の時間だ。余はもう寮へと戻る。セラもそろそろ帰るがよい」

アレイスターはセラフォルーが何か言う前にさっさと転移で寮へと帰ってしまう。セラフォルーもアレイスターの最後の言葉が気になりながらも帰路につくのであった。

◇

次の日、学院へと着いたセラフォルーはあるニュースを耳にする。セラフォルーを虐めていた主犯格の奴らが纏めて退学したと言うのだ。詳しく聞いてみればみな気が狂ってしまったとの事だ。何を言っても「いあ……いあ……」と言うだけで反応がないらしい。確かにアレイスターの仕業なのだが本人に聞いても誤魔化されてしまうのであった。

こうして確かにセラフォルーへの虐めはなくなった。しかし同時に放課後のアレイスターの静かな読書もなくなってしまうのであった。

第6話

戦争が始まって長い年月が経過した。人間より長い寿命を持つ天使、墮天使、悪魔達にはそれが数ヶ月なのか、それとも数年なのかもう分からなくなっていた。お互いに引く事が出来ないままズルズルと長引き、犠牲者のみが増え続けてゆく。天使、墮天使陣営は多くの幹部を失い悪魔陣営もルシファーを除く魔王達を討ち取られていた。

アレイスターも母を失った日から変わった。いや、変わったというのは間違いだ。正しくは”戻った”であろう。

あの日からアレイスターには一切の容赦がなくなった。すこし前であれば撤退してゆく敵ならば態々手にかける事なく見逃していたが今では逃走兵だろうが関係はない。敵兵ならば容赦なく皆殺しにする。慈悲は無くただひたすら作業の様に淡々と敵兵を殺す様は味方であるはずの悪魔達からも恐れられていた。しかし、それでも友であるサーゼクス達だけはアレイスターから離れる事はなかった。

終わりの見えない泥沼化した戦争にある日、突如として転機が訪れる。二天龍と称される赤龍帝ドライグ、白龍皇アルビオンが争いを始めたのだ。何処ぞの竜が喧嘩をするのなら何も問題はなかった。しかし一部の者を除けば最強である二天龍の争いである。いくら本人達はその気がなかったとしてもその争いに依る余波は各陣営に多大な被害をもたらしていたのだ。そうやってしまえばもう戦争どころでは無い。結果として一旦戦争は休戦となり、各陣営のトップによる対二天龍の会議が開かれる事となった。

◇

「いままで散々戦ってきたのにこうして顔を合わせるなんて変な感じだな」

「ああ、まったく厄介な時に暴れてくれるもんだぜ。あの二天龍共は」

悪魔からは魔王ルシファアが、墮天使からは総督アザゼルが、そして天使からは聖書の神がそれぞれこの会議に出席していた。

「それで、お二方は何か案があるのでしようか？」

「そんなもんあったらここには居ねーよ」

「俺もなんも思いつかんわ。戦争で頭脳担当が死んじまいやがったからな。俺は基本的に労働担当なんだよ」

アザゼルが聖書の神に悪態をつく。脳筋であるルシファアも具体的案を持つていなかった。そこへ聖書の神がある提案をする。

「ともかく二体を同時に相手にするというのは無謀です。分断して各個撃破を狙うというのが最善でしょう」

「まあ確かにそれはそうだが……」

「分断させる役目は我々天使が引き受けましょう。残る皆さんは待ち構えて分断した二体を仕留めて下さい」

聖書の神が自信満々に自らの案を説明する。確かに二天龍を分断するというのはよい考えであった。しかしここである事にアザゼルが気付く。

「おい、ちよつと待て。分断させるのはいい。だが此方の戦力も二つに分けなきやなんねーぞ。それだといまの俺らの戦力じや二天龍を倒せるとは思えねえ」

「確かにアザゼルの言う事は最もです。しかし二天龍を一人で相手どる事ができるかもしれない者がいるでしょう？お二方も心当たりがあるはずです」

「——金色の魔人か」

聖書の神の言葉にアザゼルは一人の悪魔が思い浮かぶ。アレイスターだ。アレイスターはどの悪魔とも一線を画す存在である。アザゼルも戦争中その力は嫌というほど味わってきた。もしかすると二天龍をも凌駕するかもしれない。そう思えるほどの力だった。

だがそれに反論するのはルシファアだ。

「てめえ、まさかアレイスターに一人で戦わせようって言うんじやねーだらうな？」

ルシファアの言葉にははつきりと怒りの感情が込められている。それもそのはず、聖書の神の作戦は普通に考えれば死ねと言っているようなものだ。ルシファアからすれば、そのような事は到底認める事はできなかつた。

「それが最善だと私は思います。他の案があるならどうぞご提案を」
「ぐっ！」

そう言われると反論する事が出来ない。ルシファアは肝心な時に死んだ頭脳担当の魔王と回らない自分の頭が憎かつた。

「異論はない様ですね。それでは細かい所を詰めて行きましようか」

ルシファアの握りしめた拳からは悔しさと不甲斐なさのあまり血が流れ出ている。結局何も思い付く事は無く聖書の神の案を採用するしかないのであつた。

◇

戦争が一時休戦となり僅かな間ではあるが冥界に平和が訪れる。しかしそれは再び二天龍が暴れ始めれば崩れ去ってしまう儚いものであつた。

そんな中アレイスターは一人、今は静まり返っている戦場を歩いていた。辺りには深く戦争の爪痕が残されている。その光景はまさに地獄。損傷が激しくどの種族か分からないため放置されている死体、抉れた地面、おびただしい血の痕跡。そのほとんどがアレイスターによつて作り出されたものであつた。

確かに母を殺した原因である聖書の神は憎かつた。だが全ての天使が憎いかと言われれば別にそういう訳でもない。自分がその気になれば全て終わらせる事ができるのに実際にやっている事はただ漠然と目の前にいる敵を殺すだけ。無限回廊に捉えられていた時ならばこんな事を考えはしなかつた。大十字クロウ以外の全てに興味がなく邪魔をするのなら排除する。それが大導師マスターテリオンであつたはずだ。

だが今はどうだ？アレイスターの行動は全くチグハグな物で

あった。

「アレイ君」

「セラか……」

自らを呼ぶ声を聞き、そちらへと振り向いてみればセラフオルーが佇んでいた。どういう訳かセラフオルーの顔は今にも泣き出しそうな表情をしている。

「何故そんな顔をしている」

「だって……だって……あんまりだよ！アレイ君はこんなに頑張っているのに！どうしてみんな……」

母は殺され、仲間の悪魔達からは受け入れられることはない。残る父も復讐に取り憑かれアレイスターと久しく会ってはいなかったら。友人達から見たアレイスターはもしかすると焦燥している様に見えたのかもしれない。

「余は元より孤高。セラ達も余と共に居ればまた小煩い奴らに色々言われるだろう」

「そんな事言わないで!!」

アレイスターの突き放す様な言葉にセラフオルーは大声をあげた。セラフオルー達は戦争で多大な戦果を挙げた。本人達が由緒ただしい貴族出身である事もあり悪魔達からは英雄扱いされているのだ。

一方、アレイスターは絶大な戦果を挙げつつも一部を除きまるで腫れ物の様な扱いをされていた。

次期魔王と称されるセラフオルー達がそんなアレイスターと共にいるのは貴族達にとって当然面白くない。それゆえ幾度と無くアレイスターと距離を置く様に言われていたがセラフオルー達がそれを受け入れる事は無かった。

「私はアレイ君とずっと一緒に居たい!!!だって……だって私はあの時から！「おう、ここに居たのか。お前ら」え？」

「いや、何処にも居なかったから探しちゃったよ、ってセラフオルー？どうした？」

「知らないっ！魔王様の馬鹿！」

「へぶっ！」

勇気を振り絞ってアレイスターへと告白しようとした所に絶妙なタイミングで魔王ブロックが入る。本人に悪気はないのだがセラフォルーにとってはたまったものではない。せつかくの機会を邪魔されたセラフォルーはルシファーにビンタをした後恥ずかしさのあまり走り去ってしまうのだった。

「災難であつたな魔王よ」

「いつつ……一体何だつてんだよ」

「ふふ、いささかタイミングが悪かつたようだ。それで？余に何か用か？」

「すまねえ！俺が不甲斐ないばかりに!!」

「……何やらよく分からんが顔を上げよ。王がそうやすやすと頭を下げるものではない」

ルシファーがその場で勢い良く土下座をする。他の悪魔がその光景を見ていたらきつとまた騒いでいただろう。しかしこの場にはアレイスターとルシファーしかない。

ルシファーは顔を上げて対二天龍作戦をアレイスターへと説明する。アレイスターはそれを顔色一つ変える事無く聞く。ただ発案者が聖書の神だと聞いた瞬間だけはスつとアレイスターの目が細まった。

「魔王だなんだついても結局最後にはお前に頼りきりになつちまう。俺は駄目な王だ」

「気にするな。二天龍程度、大した障害では無い。それよりも余が一匹仕留めている間にそちらがやられる方が心配だ」

「ああ、お前が言うとお前が大した事のないように聞こえるよ。ただ、気をつけてくれ。俺は聖書の神が何か企んでる気がしてならないんだ」

「無論だ。それにあやつにはしかとその身に報いを受けて貰わねばならん」

三大陣営の存亡はほぼアレイスターにかかっているといても過言ではない。

作戦決行は明後日。平和を願う者、計略を張り巡らす者、復讐を望む者。様々な想いが渦巻きながら三大陣営は東の間の平和を過ぐすのであった。

◇

作戦決行当日、強大な戦力であるサーゼクス達四人も駆り出された。

「いよいよか。無事成功するといいのだが……」

「それよりもアレイ君が心配だよ！ たった一人で二天龍を相手にするなんて！」

セラフオールの意見は最もだ。四人は誰一人としてこの作戦に納得している者はいない。しかし現状、自分達にできる事は無いためアレイスターを信じるより他がなかったのだ。

「ようーお前ら緊張してないか？」

「二「魔王さま！」二」

「いいって、いいって。楽にしな。それよりも悪かったな。本来ならこんな作戦にお前らみたいなのが若者を参加させたくなかったんだが……」

「それだったらアレイ君はどうなんですか!!!」

「ああ、耳が痛いな」

セラフオールの言葉にルシファアは苦虫を噛み潰した様な顔になる。ルシファアとしても苦渋の決断であった。だが、守らなければならぬ民達がいる。

この中で最も自分の無力さを嘆くものは間違いなくルシファアであっただろう。

「来たぞ!! 二天龍だ!!!」

その時一人の伝令が声を上げた。天使による分断が上手くいったらしい。遠目でその姿が確認できた。

赤い、そして圧倒的な大きさ。赤龍帝ドライブだ。

必死に逃げる天使達を悠々と追いかけてながら空を飛ぶその姿は

まるでわざわざお前らの作戦に乗ってやったんだぞとでも言いたげであった。

『お前らか。俺とアルビオンの邪魔をしてくれた奴らは』

辺りにドライグの声が響き渡った。空と大地が震えている。さすがは二天龍、まさに圧倒的な存在感だ。

「よく言うぜ。てめー等が勝手に暴れてんじゃねーか。迷惑してるのはこっちだつっの」

アザゼルが負けじと言い返すがそれにドライグは一切取り合わない。その態度にアザゼルは激しい苛立ちを感じる。

『お前らは地面に這いつくばるアリの事を気にするのか？ まあこつちもいつまでも邪魔されても迷惑だ。だから今日ここでお前らを蹴散らしてやろう!!!』

ドライグが巨大なブレスを放った。

『boost! boost! boost! boost! boost! boost! boost! boost! boost!』

「くっ！総員退避ーッ!!!」

ドライグの能力によってただでさえ巨大なブレスはさらに勢いを強める。もはやまるで小さな太陽のようだ。

ルシファーが慌てて退避命令を出す但直後、自陣が大きく火柱をあげる。

「何という一撃だ……」

サーゼクスは今の一撃を見て呆然とする。まさに桁違いの威力だ。今ので全軍の一割程度が持つていかれただろうか。

「ッ！各自分散してかかれ！纏まってるど一氣にやられるぞ！」

『ははははは！さあ逃げる逃げる！まだまだ始まったばかりだぞ！』

こうしてあまりに絶望的な戦力差の三大陣営対二天龍の戦いの火蓋が切って落とされる。

戦いの結末は三大陣営の壊滅か？それとも……

第8話

戦争が終わり、各陣営は勢力の立て直しが課題となっていた。

それは悪魔も変わりなく戦争による被害の復興と同時に貴族、重鎮達による今後についての話し合いが日夜行われていた。

「それでは次期魔王はサーゼクス・グレモリー、アジュカ・アスタロト、セラフォル・シトリ、ファルビウム・グラシャラボラスの四名でよろしいですか？」

『異議なし！』

この話し合いで最も時間を費やしたのが次期魔王の選出であった。

今回の戦争でソロモン72柱の約半数は断絶してしまい現在、悪魔自体が存亡の危機にさらされてしまっている状態である。そういう訳で、名家という枠組みを取っ払った上で若く求心力のある悪魔が魔王に選ばれるべきだという意見が大半を占めていた。

しかしそうになると面白くないのが前魔王の血筋の悪魔達である。当然世襲制だと考え自らが正統な魔王の血筋であると思っている者達がそれに反対し始めその結果、旧魔王派對新魔王派という対立が勃発し議論を長引かせていたのだった。

旧魔王派と新魔王派の論争は過激化し遂に新魔王派が強行採決をとってしまう。人数自体は新魔王派が大多数を占めていたため旧魔王派は議論を打ち切り退席してしまった。これ幸いと新魔王派は新たな魔王を選出したのだった。

その結界、選ばれたのがサーゼクス達四人の悪魔だ。四人とも先の戦争で輝かしい活躍をした者達である。

「さて、残す議題はあと一つですな……」

議長が悪魔がそう切り出した瞬間に先程まで騒がしかった議会が打って変わって沈黙に包まれる。

「神殺しの悪魔、アレイスターの処分に対する論議を行います」

アレイスターへの処分、それは対二天龍作戦の時聖書の神を殺害した事に対するものであった。あれが戦時中ならば何も問題がなかった。しかしあの時は僅かな期間ではあるが休戦中であつたのだ。更に誰がどう見ても故意による殺害であり、天使、墮天使からも、お前らあれどうにかしろよという無言の圧力がかけられていた。

「……………どなたか意見はありませんかな？」

議長がそう促すが誰一人声をあげるものはいない。それもそのはず、皆戦争を通じてアレイスターの圧倒的な力を目の当たりにしているのだ。

誰も発言しないまま時間が過ぎていく。もう何分たったのであろうか、続く沈黙に誰もが痺れを切らし始めた時、一人の悪魔の音が響き渡った。

「やはり……………コキュートスへの永久凍結しかないのではないか？」

「ちよ、ちよっとまってくれ！確かに彼は罪を犯したかもしれない！しかし戦争で最も戦果をあげたのも彼だろう！それに二天龍の時も彼がいなかったら我々は死んでいたではないか！それを忘れて永久凍結とは！」

「そうは言いますがグレモリー卿、あの者の力は大き過ぎる。貴方もご覧になったでしょう？あの聖書の神へと行使した力を。あれはもう一人としての力を大きく超えている。いつかあの力が我々に牙を向くかもしれないのですよ？」

「そのような憶測で……………」

一度広がったもう波紋は止める事が出来ない。それまで沈黙を保っていた悪魔達が次々と永久封印へと賛成の意を示し始める。

「往生際が悪いですぞ、グレモリー卿。貴方以外はもう皆、賛成しているのです」

「もういい！埒があかん！私はここで失礼する！」

一人反対の意を示していたサーゼクスの実父であるグレモリー卿が退席する。

その後、まるでできたない物には蓋をと言わんばかりに議論はどうアレイスターへと刑を処すかへと移っていった。

「しかしあの者が素直に刑を受けるとは思えませんな。かといって力づくというのはとてもじゃないが無理だ」

再び議会が無言に包まれる。

「そのお話、この私に任しては貰えないでしょうか？」

そこへ一人の男が議会へと入ってきた。

「そなたは…… 確かマルファス家の跡取りだったか？」

「マルコ・マルファスと申します」

「して、そなたは何か案があるのか？」

「はい、必ずやアレイスターを捕らえて見せましょう」

「よろしい、それだけ言うのならやってみるがよい」

「はっ！了解しました！」

マルコは怪しく笑みを浮かべながら恭しく礼をする。

こうして再び身の程を知らない男はろくに回らない頭で愚かにもアレイスターを陥れようと企むのであった。

◇

アレイスターはとある屋敷の一室で読書をしていた。現在アレイスターは軟禁状態であるのだが本人からすれば何時でも抜け出せるので久しぶりの休暇のつもりでくつろいでいたのだった。

そこに突然乱暴に扉が開かれる。

「大罪人アレイスター！貴様の刑が決まったぞ！大人しく従うんだな！」

「もう少し優雅に出来ないのか？扉が悲鳴を挙げているではないか」

アレイスターは読んでいた本をパタンと閉じ立ち上がる。

「ふむ、貴公とは何処かであったか？何やら見覚えがある気がするが……」

「き、き、貴様！この俺の顔を忘れたと言うのか！」

マルコが激昂するがアレイスターは首を傾げるばかりで思い出した様子は一切ない。興味のない物には一切頭のリソースを割かないアレイスターはマルコ・マルファスという男の事は当然覚えていな

かったのである。

「ふ、ふん！まあいい。本来ならお前はコキユートスへの封印刑だがこの俺がここで殺してやる！」

「余を殺す？貴公の様な三下が？残念だがそれは不可能だろう」

「そういつていられるのも今のうちだ！これを見ろ！」

「貴様……」

マルコを守るように二人の男女が現れる。その容姿は死んだ筈の父エドガー、母ミーシャと瓜二つであった。

「ヒヤハハハハハハ!! どうだ驚いたか！こいつらはお前の親のクローンだ！こいつらを作るのには苦勞したぜ！だが流石のお前もこいつ等には攻撃できまい！」

「やはり三下だな、貴様は」

「ヒヤ？」

アレイスターは二人のクローンを躊躇なく切り殺す。

「実に浅はかなり。この様な皮だけ似ている紛い物で余をどうにか出来ると思つたのか？だが我が両親の死を侮辱したのは事実。故にその命を持つて詫びよ」

そう言うや否や剣を一闪、マルコの首を跳ねた。あまりの剣速にマルコは自分が死んだ事さえ気付かなかつただろう。アレイスターにしては随分と優しい制裁であつた。

アレイスターはゴトリと落ちた首を掴む。

「さて、エセルドレーダよ。この件の黒幕にも挨拶せねばな」

「イエス、マスター」

アレイスターとエセルドレーダはそのまま貴族達の元へ向かうのだった。

◇

「これである者が成功すれば万事解決ですな」

「そうですな」

はははは、という笑い声が議會沸き起こる。貴族達はまるで肩の

荷が下りたかのような笑顔を浮かべていた。貴族達は自分たちが何をやったのかまるで分かっていないのだ。この場に真にアレイスターの事を理解している者が居たらきつと場にいる悪魔全員の事を愚か者と罵ったであろう。

「皆の物、ずいぶん楽しそうではないか。余も混ぜては貰えぬか」

「あ、アレイスター!!!」

突然現れたアレイスターに議会は騒然となる。

「まあそう騒ぐな。余は土産も持参したぞ?」

「ひっ!」

そういつてアレイスターは何か球状の物を議会の中心に投げ入れた。先程切り落としたマルコの生首だ。

「ぎ、貴様!こんなことしてただで済むと思っているのか!」

「なに、この者は先程余を殺そうとしてきたのでな。正当防衛で殺してしまった。その時に何やら議会がどうのこうの言っていたが皆は何か知ってはおらぬか?」

「し、知らぬ!わし等は知らぬぞ!」

議長が答えるがあくまでしらを切るらしい。

「誠か?」

「ほ、本当……ギヤアア!!」

アレイスターが議長の腕を切り飛ばした。その行動に一切の容赦はない。他の悪魔はそれを見て顔を青ざめている。

「誠か?と聞いている」

「た、確かにお前を封印刑に処すことにはなっていた!しかし殺せとは言っていない!」

「ほう?最初からそういえば腕も無事だっただろうに」

アレイスターは議長から目を外し議会をぐるりと見回した。場にいる悪魔達は次は自分の番ではないかと思いい戦々恐々としながらアレイスターと目を合わせまいと下を向いている。

沈黙が続く。しばらくするとアレイスターが口を開いた。

「それほど余が邪魔ならば自ら出て行ってやろうではないか」

予想外のアレイスターの言葉に悪魔達は目を丸くした。

「本来ならば皆殺しにしているところだが…… 貴公らのような者でも居なくなればサーゼクス達が困るであろう。よって今回は殺しはせん」

自らが助かったことに胸を撫で下ろす悪魔達。

「二度目はない。しかとその胸に刻んでおけ」

その言葉を最後にアレイスターの姿が忽然と消える。緊張の糸がきれた悪魔達はその場にへたり込むのであった。

◇

「貴公らか。随分と情報が早いではないか」

「アレイスター、今ならまだ正当防衛で済むはずだ。戻ってくるんだ」

もう少して冥界の出口に差し掛かった所でサーゼクス、アジュカ、セラフオールの三人が待ち構えていた。どうやら三人はアレイスターを引き止める様子だ。

「残念だがそうはいかない。もう悪魔につく義理などない。それに余はこの世界が知りたいのだ。大人しくそこをどいてもらおうか」

「君をはぐれにさせる訳にはいかない。それに僕たちは次期魔王だ。いくらかの口添えぐらいはできるはずだ」

「組織の長として私情を挟むのは感心せぬぞ、サーゼクス」

「アレイ君ー」

「くどい。我を通すのなら力を持って示して見せよ」

アレイスターから威圧感が噴き出す。

「マスター、その小娘は私にお任せ下さい」

「エセルドレーダか。まあよい。殺さぬようにな」

「よう、アレイスター。ずいぶんと可愛い子連れてるじゃねーか」

アレイスターの横に少女が現れる。三人は一瞬驚くが警戒を緩めることはない。なぜならばその少女からはアレイスターと同等の威圧感が感じられるからだ。

「ふむ、貴公らには見せた事が無かったか。紹介しよう。我が相棒に

して、最愛の伴侶。エセルドレーダだ」

「始めまして、マスターの友と雌猫」

「うそ……」「本当かい?」「マジか」

サーゼクス達は三者三様に驚く。まさか友人が結婚していると
は思わなかったからだ。特にセラフオルーは呆然としている。

「さあ、いつまでも話していてもしょうがない。いい加減始めよう
ではないか」

「貴方の相手は私よ、雌猫」

「ッ!」

アレイスター、エセルドレーダ対サーゼクス達の戦いが始まっ
た。

戦いといってもアレイスターから攻撃する事はない。ただひた
すら相手の攻撃を弾く、弾く、弾く。サーゼクス達も全力を持って攻
撃するがアレイスターはまるで意にかいした様子はない。

「もう気は済んだか?」

「はあ……はあ……ま、まだだ……」

いかにサーゼクスとアジュカが超越者と言われていようともア
レイスターとではそもそもその自力が違いすぎる。その差は歴然で
あった。もはやサーゼクスとアジュカの体力は尽きかけていた。

「マスター、こちらは終わりました」

エセルドレーダがアレイスターに声をかける。その姿はアレイ
スター同様、全く汚れておらず右腕にはボロボロのセラフオルーを抱
えていた。

「よくやった、エセルドレーダ。さて、こちらも終わりでしょうか」

アレイスターが動く。次の瞬間、サーゼクスとアジュカは地面に
倒れていた。構えていたはずだった。しかし何をされたかもわから
ずに地に伏している。

「あ……れい……すた……」

「今日、余達の歩む道は別れる。だがいつかまたその道が交差する日
がくるだろう。その日まで暫しの別れだ」

その記憶を最後にサーゼクスとアジュカの意識は途切れた。

「いるのだろうか？ファルビウム」

「アレイスターは何でもお見通しだね？」

突然、アレイスターがファルビウムの名を呼ぶ。すると木の影からのそのそとファルビウムが現れた。

「貴公も余を止めるか？」

「えー、無理無理。サーゼクスとアジユカの二人掛かりでダメだったのに僕一人で何とかできるはずないじゃないか」

「ふっ、貴公らしい発言だな」

アレイスターは笑う。ファルビウムもそれにつられて笑った。

「アレイスター、僕たちは頑張るよ。いつかこの冥界の体質を変えてみせる」

「そうか」

「きつとまた会える日がくる。君に何かあるとは思えないけど、それまで元気でいて」

「ああ。それではな、我が友ファルビウムよ」

「うん」

アレイスターはファルビウムに背を向け歩き始める。

「これから何をしようか？エセルドレーダ」

「イエス、マスター。マスターが望むのならどのような事でも」

「そうか。そうだな、この世界のあらゆる魔術を知るのもよい。今度は純粋に魔術探求のためにブラックロッジを作るのもよいな」

「イエス、マスター。マスターと共にならどこへでも」

この日、アレイスターははぐれ悪魔としての認定を受ける。そのランクは悪魔史の中で例のないSSSランク。ただし懸賞金はかけられる事は無かった。金に目のくらんだ若い悪魔達の犠牲をなくするための措置だ。

大戦を生き残った者はこう語る。

その悪魔に決して手を出す事なかれ。

さもなければ死すら生ぬるい責め苦を負わされるであろう。

神殺しの悪魔、アレイスター。彼が表舞台に舞い戻るのはまだはるか未来のことであった。

第9話

アレイスターがはぐれ悪魔になってから長い年月がたった。あれからアレイスターは世界を巡り様々な魔術、知識を吸収する生活を送っていた。

現在アレイスターは北欧の神が住まう土地、アースガルズへと向かっている。

「北欧の魔術は奥が深いという。どれ程の物か楽しみであるな、エセルドレーダ」

「イエス、マスター」

程なくすると金色に輝く神殿が見えてきた。神殿の中からは神々しいオーラを感じる。おそらくあれが神々の住まう神殿、グラスヘイムなのだろう。

「その者！止まれ！ここは北欧の主神オーディン様の住まう神殿。許可なき者が通る事は許されていない！」

「ほう？あれが北欧のヴァルキリーか」

アレイスター達の行く手をヴァルキリー達が遮る。ここまで無断で侵入してきたのだ。その行動は当然の事であろう。

「なに、別段貴公らを害すつもりで参ったのではない」

アレイスターは一步、歩みを進めた。その瞬間、ヴァルキリー達の警戒レベルが上がる。

「動くな！これ以上進むというのならそれ相応の対応を取らせてもらうぞ！」

ヴァルキリー達の長、ブリュンヒルデがそう警告した。だがアレイスターが止まる事はない。もともと北欧の魔術を見にきたのだ。わざわざそれを使ってくれるというのならそれでもいいか、というのがアレイスターの考えであった。

「ツ！ヴァルキリー隊！放てーツ！」

「馬鹿者！焦るんじゃない!!」

依然として止まる事のないアレイスターに焦った一人のヴァル

キリーが攻撃の合図を出す。慌ててブリュンヒルデが止めようとするが時すでに遅し。ヴァルキリー隊が一斉に魔法を放ち、色とりどりの魔法がアレイスターへと着弾した。

「はあ……はあ…… 警告を無視するからそうなるのよ」

「なるほど、これが北欧の魔術か。威力はなかなかのものだ」

「そんな……」

魔法の余波による煙が晴れると傷一つ負った様子のないアレイスターが現れた。その様子に攻撃したヴァルキリー達は啞然とする。完璧に決まったはずであった。自らの腕にも自信があった。だが結果はどうだ？ 相手はまるで意にかいした様子がないではないか。ヴァルキリー達は己の自信が砕けそうになるが、自分達の使命を放棄する訳にもいかない。必死に自分を奮い立たせ、アレイスターの前に立ちふさがるのであった。

「良い物を見せて貰った礼だ。余も一つ、魔術をお見せしよう」

アレイスターの手に膨大な魔力が集まっていく。たった一人の筈なのにその魔力は先程のヴァルキリー達のそれを遥かに超えていた。

「ABRA……HADABRA!!!」

「きやああ!!!」

次の瞬間、アレイスターの手から雷撃が放たれた。ヴァルキリー隊を飲み込みそのまま神殿へと直撃する。

「ば、馬鹿な…… この様な事が……」

難を逃れたブリュンヒルデは目の前の光景に戦慄する。たった一回の攻撃で自分を除くヴァルキリーのほとんどが全滅したのだ。加えて偉大な神殿、グラムヘイズが爆破解体作業の現場の様になってしまっている。

「なんだ、思ったより残っているではないか。やはり北欧の魔術は優秀だな」

アレイスターとしては全員戦闘不能させるつもりで放ったのだがヴァルキリー達の障壁が思いのほか頑丈であったため、全滅には至らなかったのだ。それでも壊滅という言葉に相応しいだけの被害は

出ていた。

そんな中、ただ一人無傷のヴァルキリーが目に入る。

「これは驚いた。まさか余の魔術を防ぎ切るとは」

「あ……あ……」

「逃げろ！逃げろロスヴァイセイ！」

ブリュンヒルデが必死にまだ幼いヴァルキリーへと逃げるように叫ぶがアレイスターを目の前にして放心してしまっている。

このヴァルキリーの少女、ロスヴァイセイは飛び級で訓練校を終えた非常に優秀なヴァルキリーであった。

勿論いくら優秀であろうともアレイスターの魔術を防ぎ切ったのはロスヴァイセイだけの力ではない。周りの年上のヴァルキリー達がロスヴァイセイだけでも守ろうと庇ったことも大きかった。

「その年齢でその技術とは……気に入った」

「ヒッ！」

アレイスターがロスヴァイセイへと手を伸ばしたその時、

『グングニル!!』

何処からか声と共に槍が飛んでくる。それからは強大な神の力を感じる。相当な強者であろうとも屠る事の出来る一撃であった。だが、アレイスターとして普通ではない。慌てずにそれを容易く弾き声がする方を向いた。

「なんじゃ、まるで効いておらんわい。噂通りのようじゃな？金色の魔人よ。しかし、些か暴れ過ぎではないかね？」

「これはこれは、貴公が主神オーディンであるか？お初にお目にかかる。余は大導師マスターテリオン。世界の魔術を探求する者だ」

そこにはオーディン、トール、フレイなど名だたる神達が勢揃いしていた。全員がそれぞれの武器を持ち臨戦体制をとっている。

「お主の噂はここ北欧にもよう聞こえてくるわい。して、何れでこのような所まで参った？」

「先程も行ったとおり余は魔術が好きでな？世に名高い北欧魔術を一目見ようとここまでできたのだよ」

「貴様！それだけの為にこのような暴挙を働いたというのか!!」

神々の一柱であるロキが激昂する。確かにたったそれだけで自分達の住まう土地をボロボロにされては溜まったものではないだろう。

「やめんかロキ！他のものも一緒じゃ！決して手を出すでないぞ！」

オーデインは知っていた。アレイスターが聖書の神に対して行った事を。神々にとって最も恐れる事はその神性を失う事だ。何としてもそれだけは避けねばならない。決してアレイスターを怒らせてはならないのだ。

しかしオーデインは知識に対して非常に貪欲な神であった。アレイスターが聖書の神に何をしたのか、アレイスターは何者なのか？好奇心からつい左目の水晶の義眼でアレイスターの事を見てしまう。それがどういふ事かもわからずに……

「ツツ!!グアアア!!」

「オーデイン！どうしたオーデイン！しっかりしろ！」

アレイスターを見た瞬間に大量の何らかのイメージが頭に流れ込んできた。何だこれは。こんな物今まで見た事もない。あり得ない。理解出来ない。この世のおぞましさを密集してもこれには敵わない。

強烈な頭痛がオーデインを襲う。正気を保つ事が出来ない。

「アアアアア!!」

周りの神は突然の事に騒然とし始める。

「ご老公、そこらへんにしておけ。貴公程度の器ではそれ以上視るともう戻れなくなるぞ」

アレイスターがそう言うと、オーデインはその場で崩れ落ちた。「はあ……はあ……お、お主は一体何なんじゃ……そのようなあり様など……」

「それを知るにはご老公、貴公では些か荷が重すぎる。さて、余の目的はもう達したのでな。ここらで余は去らせてもらおう」

「そう言うわけにはいかないだろうがっ!!」

「いかん！やめよツール！」

去ろうとするアレイスターへとオーデインの制止を無視して

トールが突撃する。北欧の戦闘神としての誇りからアレイスターをむぎむぎと帰す訳にはいかなかったのだ。そして、そのまま手に持つミヨルニルをアレイスターへと叩きつけた。

「流石は雷神トールといった所か。素晴らしい威力だ」

「ッ!!」

しかしアレイスターによって片手でそれを防がれる。今までこれをくらって死ななかつた者などミドガルズオルムぐらいであった。それでもダメージは与えていたが目の前の魔人にはそれすらも一切見当たらない。

「そら、返礼だ」

「ガハッ!!!」

トールの腹部に一撃、アレイスターの拳が叩き込まれトールはたまらず吹き飛ばされた。

「さて、他のものもやるかね?」

神々は一様に沈黙する。北欧神話最強の神トールが一蹴されたのだ。もはや自分達ではどうする事も出来ないことはわかっていたのだ。

「それでは今度こそお別れと行こう。ではな、オーデインとその他の神よ。またいつか会おうではないか。そしてそのヴァルキリーよ。余は貴公の事が気に入った。次に会う日を楽しみにしていよう」

アレイスターが転移を発動させ目の前から消える。残ったのはボロボロになったグラムヘイズと呆然とする神々のみだ。

「もう二度と会いたくないわい……」

オーデインのこぼした独り言だけがこだまするのであった。

第10話

ここは北欧の森の中。辺りは薄く霧がたちこめ、背の高い針葉樹の上から射し込む日光が薄明光線を作っている。その中をアレイスターとエセルドレーダが歩いていた。その姿は、二人の容姿と周りの景色が相待ってまるで映画のワンシーンのようだ。

「なかなか有意義な時間であったな」

「イエス、マスター」

「特にあのヴァルキリー、将来どれ程のものになるか楽しみだ」

アレイスターは先ほどのアースガルズへの訪問に満足し上機嫌であった。目的の北欧魔術を目にし、面白い人物にも目を付けた。これ以上はない結果だった。

「やはり北欧という場所は美しいな。森一つとっても幻想的なものではないか」

「同感です」

エセルドレーダと会話しながら森を進む。機嫌のいいアレイスターはいつになく饒舌だ。

その時、側の茂みからガサツという音が聞こえた。気配からして獣の類ではないようだ。近づいて覗き込んで見れば、まだ十歳にも見えないであろう白髪の少年が倒れこんでいる。

「はあ……はあ……」

「ふむ」

その姿は血にまみれ、着ている衣服もボロボロであった。痩せ細った手足を見るに栄養失調である事も伺える。ここはまだアースガルズに近い北欧の森の中、本来ならばこの様な所に人間がいるのは不自然であった。

「少年よ、貴公は何をしている」

「……………」

少年からの返答はない。衰弱しきっていて返答する元気もないようだ。放っておけば間もなくこの少年の命は尽きるだろう。その

とき、ふとアレイスターは自分が悪魔であった事を思い出す。今の今まで忘れていたが悪魔は人間と契約する存在だ。せつかく悪魔になったのだ、暇潰しにこの少年を救ってやるのも良いかもしれない。そう思つてアレイスターは再び少年に声を掛けた。

「貴公は間もなく死ぬだろう。だがまだその命に執着するというのならば、余がその命、拾つてやろうではないか」
「……………ッー」

少年の身体がピクリと反応した。

「さあ少年よ、そのまま朽ち果てるか、生にしがみつき生きながらえるか。貴公の好きなように選ぶがよい」

「……………たい」

「聞こえんな」

「……………たい ……きたい 生きたい！生きたい!!! 生きて奴等に！教会に復讐するんだ!!!」

少年が吠えた。その小さな命は再び生を望む。身体は衰弱し、這いずることしか出来ないがその目は強い意思を宿しギラついていた。「良い目だ。よろしい、ならば契約だ。その命、余が救つてやろう。これからは余の為にその命を使え」

「あ……………」

アレイスターが少年の傷ついた身体を魔術で回復させる。少年は限界を迎えたのかそのまま意識を失った。

「よろしいのですかマスター？」

「ああ、そろそろブラッククロツジのメンバーが欲しかったからな。本日をもって魔術結社ブラッククロツジ再結成といこう」

アレイスターが笑い声をあげる。

「しかし、一人目の構成員が魔術師でも何でもない少年か。これもまた面白いではないか」

気を失つた少年を無造作に掴み再び二人は歩き始める。こうして遂に、この世界で魔術結社ブラッククロツジが設立することとなったのだった。

◇

「ほらほら、しっかり避けなきゃ死ぬわよ」

「ちよっ！無理無理！これは無理だって姐さん！」

俺、フリード・セルゼンがボスに拾われてもう一年がたつ。

俺は教会で行われていた聖剣計画の被験者だった。人工的に聖剣使いを作り出すっていう糞みてーな計画だ。俺はそこで聖剣に適合する為に散々身体をいじくり回された。結局、適合する事が出来なくて処分されそうになったので命からがら逃げ出し死にかけていた所でボスと出会った。初めてであった時はあの世界のお迎えが来たと思っただね。あんまり綺麗な金髪で浮世離れした雰囲気なもんだから天使だと錯覚しちゃった。けど蓋を開けてみたらビツクリ！

あの金色の魔人じゃくあくりませんか！

多少なりとも裏側に関わる奴ならば誰でも知ってるような大悪魔だ。その時ばかりは終わったと思っただね。だから部下になれって言われた時は心底驚いた。俺みたいな奴が金色の魔人の目に止まるとは思ってもみなかったからだ。そりやそうだろ？俺はただのズタボロのガキだったんだ。得意な事なんてありやしない。魔術のまの字も知らないんだぜ？それでもボスは俺を拾ってくれた。だから俺はボスの為なら何だってするって誓ったんだ。

ボスは俺がクソツタレの協会に復讐したいと言っても何も言わなかった。けどその為の力が欲しいと言っただけからは俺を鍛えてくれた。実質的な師匠は姐さんだったけど……

姐さんってのはいつも師匠と共にいる謎の人だ。名前はエセルドレーダ、見た目はロリロリな人だがこの人もボスと同じで半端じゃない。避けなきゃ一発で死ぬような魔力弾をポンポン放ってくる。そのせいで毎回俺はズタボロになっていた。こんな感じで喋ってるけど今も姐さんが魔力弾を飛ばして来ている。

あつ……これは避けられない……

「あんぎゃー！！！」

「ふう、今日はこれで終わりね」

もう……むりぽ……

◇

黒焦げになったフリードが転がっている。今日も頑張っていたようだが、流石にたった一年ではあのナコト写本であるエセルドレーダには手も足も出るはずがなかった。

「少し出てくる。留守は頼んだぞエセルドレーダ」

「何か御用事でしようか？」

今までフリードの訓練を見ていたアレイスターはおもむろに立ち上がりそう言った。

「この辺りで何者かが争っている気配を感じる。それを見に行こうと思っただけ」

「わざわざマスターの手を煩わせる訳には行きません。私が確認して参りましょう」

「いらん。エセルドレーダはフリードを見ておけ」

「イエス、マスター」

アレイスター至上主義であるエセルドレーダは自分が行くと提案するが却下され、留守番を命じられる。無論アレイスターの命令を断るはずもないエセルドレーダは素直にその命令に従った。

「それでは行ってくる」

「行ってらっしゃいませ、お気をつけて」

アレイスターは夜の街を歩き出す。向かうは先は郊外の神社、姫島神社だ。

◇

「いやあああああつ!!!母さまあああああつ!!!」

「優秀な巫女ではあったようだが、黒き天使などにそそのかさされるからそのような目に遭うのだ」

深夜の神社で一人の少女が母親らしき女性に泣きながら必死に

声を掛けている。女性は刃物のような物で袈裟斬りにされたようで、大きな傷口から絶え間なく大量の血が流れていた。少女は必死に女性の身体を揺らす。女性の反応はない。おそらくこの女性は既に亡くなっているのだろう。

少女の周りは武器を手にした大人達に取り囲まれていた。

「さて、邪悪な黒き天使の子よ。次は貴様の番だ」

一人の男が少女にそう告げた。男の持つ武器は血に濡れている。少女の母親を殺害したのもこの男なのだろう。

「恨むなら貴様の父を恨め」

「ッ!!!」

男が刀を少女に振り下ろす。少女は思わず目をつむった。

刀が少女に当たる直前、辺りに声が鳴り響く。

「二人のいたいな少女を大の大人が多数で寄ってたかってというのは美しくない。そうは思わんか?」

「誰だ!」

男は刀を止め声をする方へと振り向く。そこには金髪の男が立っていた、アレイスターだ。

「誰だか知らんが邪魔しないでもらおうか」

「何故その子を殺そうとする。いったいその子が何をしたというのか?」

「ふん、この子は黒き天使と人の間に生まれた穢れた子、生きてはいけない存在なのだ」

「親がどんな存在であろうと生まれた時点で罪がある子などいないのだよ。それがたとえ邪神の子であろうともな……」

「その存在自体が禁忌であるという者もいるのだ! 邪魔をするというのなら貴様もただではおかんぞー!」

「余と敵対するか。それもよからう、ならばかかってくるがいい」
「ほざけっ!!!」

男達が一斉にアレイスターへと襲い掛かる。しかし、男達は多少なりとも修行を積んだといっても所詮ただの人間、アレイスターの手によって瞬く間に殺されていく。

「残るは貴公一人だな」

「おのれ……なんとという理不尽な力だ……」

「貴様もあの少女の母を殺したのだろう？因果応報という奴だ。余が言っても説得力はないがな」

最後の一人の頭が弾け飛ぶ。この場で生きているのはアレイスターと少女の二人のみであった。

「さて、少女よ。無事か？」

「は、はい。あの、助けてくれてありがとうございます」

少女は怯えながらも感謝の言葉を口にする。

「礼はいらん。それよりも貴公の母を吊つてやらねばな」

「ぐすつ、母さまあ…… うわああああん！」

母の死を再確認したのか、少女が再び泣き始める。アレイスターは黙って少女の頭を撫で続けるのだった。

「朱乃からはなれるおおおお!!!」

「ふむ？」

突如大絶叫と共に光の槍がアレイスターへと降り注ぐ。無論、そんな物が効くアレイスターではないので障壁を張りそれを防ぐ。

すると、一人の堕天使が降りて来た。

「その武人のような雰囲気、貴公には見覚えがあるぞ。たしか……バラキエルという名だったか？」

「何故貴様がこんな所にいるのかは知らんが朱乃から離れろ！そして朱璃の仇を取らせてもらう！たとえ、それが無謀な事だと分かっているようにもな！」

バラキエルは光の槍を携えてアレイスターへと特攻するが、小さな影がそれを防ぐ。

「止めて!!!」

「あ、朱乃!!!」

「どうしてこの人を殺そうとするの！この人は私を助けてくれたのに！」

バラキエルは自身の娘である朱乃の突然の行動に狼狽する。アレイスターの事を妻を殺した張本人だと思っていたが、それは間違い

であつたらしい。

「この人が来てくれなかつたら私も死んでたわ！父さまは一体何をやっていたの！今日はずっと家に居てくれるって、休みだって言つたのに！父さまがいたら、母さまは死ななかつたのに！」

朱乃の糾弾が続く。

「母さまを殺した人達が言つてたわ！父さまが、黒い天使なのがいけないんだって！黒い天使は悪い人だからって！私もこの黒い翼があるから悪い子なんだって！こんな物、こんな物無かつたら母さまも死ななかつた！こんな黒い翼嫌いよ！あなたも嫌い！大嫌い！私の前から消えて！もう二度とその顔を見せないで！うわああああんっ！」

「あ、朱乃……」

「触らないで！」

最後まで言い切つた少女、朱乃はバラキエルの伸ばす手を振り払い、アレイスターにしがみつき大きな声で泣き始めた。バラキエルは何も言う事が出来ず沈痛な面持ちで下を向いている。

「親というのは難儀な物だな。この子は余が引き取ろう。なに、悪い様にはせん」

「なっ！しかし…… いや…… そうだな…… 朱乃はこれからも狙われ続けるだろう。それならば貴様の元に居た方が安全なのかもしれない。貴様の元が世界で最も安全な場所なのは間違いないからな。だが一つ、一つだけ約束してくれ。朱乃を無事育てると」

「承つた」

バラキエルにとつても苦渋の決断だったのであろう。しかし娘の安全を願うアレイスターへと託す事を決めた。

バラキエルの娘、姫島朱乃はアレイスターに引き取られる事となった。図らずも朱乃はアレイスターの元でその魔術の才能を開花させる。こうして、朱乃はブラックロッジの二人目の構成員となるのだった。

第11話

「マスター、朱乃がリアス・グレモリーに接触、予定通り眷属になる事に成功しました」

「そうか……」

朱乃をアレイスターが引き取ってから数年、そこそこの力をつけた朱乃はある任務を言い渡された。その内容は現ルシファーでありアレイスターの友でもあるサーゼクスの妹、リアス・グレモリーの眷属になれという物であった。これはアレイスター達が悪魔陣営の情報を得るための俗にいうスパイである。リアス・グレモリーが選ばれたのはグレモリー家が情愛に深い一族かつサーゼクスもいるので、いざという時にどうにかなる可能性が高いためであり、さらにアレイスターには朱乃に同性の友を持って欲しいという気持ちもあつたからである。

無論、悪魔陣営だけというわけではなくそのうちフリードを天使、もしくは墮天使陣営へと潜り込ませるつもりであつた。

「マスター？どうかなさいましたか？」

アレイスターはエセルドレーダの報告を聞いている時もなにやら不満気な顔をしていた。朱乃は無事、その任務を果たした。エセルドレーダには特にアレイスターが不機嫌になる訳が思いつかない。どうやらそれはフリードも同じようで不思議そうに首をかしげている。

「エセルドレーダ、魔術師が足らん」

「はっ」

アレイスターの言葉に一瞬理解する事が出来ずにポカンとしていると、アレイスターがその先を話し始める。

「魔術師だ、魔術師。我がブラックロッジは魔術結社だというのにエセルドレーダを含めても魔術師が2人しか居ないではないか。その上、フリードはまるで魔術が使えん」

フリードがグフッ！とショックを受けているのを横目で見る。結局、フリードには魔術の才能が欠片も存在しなかった。魔力が全く

存在しなかったのだ。魔術結社の構成員としてはどうなのかと思うが、使えないならしょうがないとフリードは己の剣の技術を鍛え続けた。結果、そこらの魔術師よりよっぽど強くなり戦闘員としては非常に優秀であった。

「これは由々しき事態だ。なので余はスカウトへ行こうと思う」
「はあ」

いつになく熱くなっている自身のマスターに流石のエセルドレーダも若干の呆れ顔だ。だが確かにアレイスターの言葉も最もである。たった二人では組織を名乗ることさえ難しいだろう。少数精銳にも程がある。

「実はもう目星をつけている人物がいる。これからその者の所へスカウトへ行ってくるぞ。ついて来いフリード」

「あいさー！」

先ほどまでショックを受けていたフリードはアレイスターの言葉を聞いた瞬間に元気の良い返事をして復活している。まさに忠犬フリードだ。

「はあ………いってらっしゃいませ」

エセルドレーダは呆れながらもアレイスター達を見送る。

アレイスターはフリードを引き連れて意気揚々とスカウトとやらへ向かうのであった。

◇

「曹操、次はフランスへ行こう。どうやらジャンヌ・ダルクの子孫が居るらしい。そいつも十分英雄の素質があるだろう」

「フランスか…… ゲオルク、今度は本当だろうな。今回みたいにハズレだったらいい加減怒るぞ」

「ははは…… 今度こそは大丈夫さ」

ここはトルコの片田舎。まだ日は沈み切っておらず鮮やかな夕焼けが空を染めている。そこを二人の学生服を身に纏った中学生らしき少年達が歩いていった。曹操と呼ばれた少年は学生服の上から漢

服を羽織っていて、もう一人の少年はローブの様な物を着ている。

「今回もゲオルグウスの子孫が居ると聞いていたんだけどね？リサーチ不足だったよ」

「全く……」

相方の無責任な言葉に曹操は呆れた様にため息を漏らす。ゲオルクという男は優秀ではあるのだが今回の様にしようもないミスをする事がしばしばあったのだ。二人はそこそ長い付き合いであるのもう曹操がそれに苦言を言う事はない。もはや慣れてしまったのだ。

「英雄の子孫達はなかなか集まらないが神器所有者はだいぶ集まってきたな」

「ああ、しかしやはり世界中どこでも神器所有者というのは迫害されているんだな。……被害を被るのは何時も俺たち人間だ」

「だけど曹操、俺含め皆、神器所有者は君に救われてきたんだよ」

「恥ずかしい事をいうな」

曹操は恥ずかしそうに顔をそっぽに向けた。ゲオルクは微笑ましそうにそれを見ている。はたからみても仲がいいのがよく分かる光景だ。

「ッ！曹操!!」

「分かっている！」

次の瞬間、二人は一瞬顔を見合わせると臨戦体制をとった。曹操は手に光り輝く槍を、ゲオルクは霧の様な物を辺りに発生させている。二人の顔は先程の軽口を叩き合っていた時とは打って変わって真剣なものとなり、額に汗を垂らしながらある一点を見つめている。

「ほう？やはり二人とも優秀な様だな、フリード」

「はいな、ボス」

曹操、ゲオルクが見つめていた場所に突如、魔法陣が出現しその上に二人の人物が現れた。

「始めまして、余はブラックロッジが大導師マスターテリオン。こちららは部下のフリードだ」

「どうもよろろびく〜♪」

一人は金髪の、もう一人は白髪の男だ。白髪の方はまだいい。確かに強者の雰囲気は感じられるがまだわかる。だがもう一人は別だ。恐ろしい程の力を感じる。気を抜けば膝まづいてしまいそうになるのを曹操は必死に堪えた。それに今この男は何といった？ マスターテリオン…… その名は……

「金色の魔人…… アレイスター……」

「ふむ、余としてはマスターテリオンの方を広めたいのだが…… 何故何時もアレイスターと呼ばれるのだろうかフリード」

「そりゃ昔の大戦の時のボスの悪名が強すぎるからでしょ」
「なるほど」

曹操は目の前で楽しそうに会話をしている二人を目にしながらも槍を握る力を緩める事は無い。何故なら目の前の人物が圧倒的な強者だからだ。金色の魔人アレイスター、かつて大戦時に天使、墮天使両陣営に莫大な被害をもたらした二天龍さえ容易く屠ったと言われている大悪魔だ。大戦を生き残った者たちは今だにアレイスターの事を恐れているという。

この時、曹操自身は気づかなかつたのだが槍を握る自身の手は力を込め過ぎて真っ白になっていた。

「それで、マスターテリオン殿は私達なんぞに一体何の用があるのでしょうか？」

「そう固くならんでもいいぞ、三国志の英雄の子孫、曹操よ。余が会いにきたのは貴公では無い。ゲオルク・ファウストの子孫、そなただ」
「俺ですか？」

ゲオルクはまさか自分とは思わなかつたため変な声が出そうになるが、それをぐっと堪える。ゲオルクの持つ神器、絶霧は神滅具だ。アレイスターはそれが狙いなのだろうか？二人はそう考えるがその予想はアレイスターによって否定される。

「何か勘違いしている様だが余が欲するのは貴公の持つ神滅具などでは無い。それが持つ能力など余にかかれば魔術で再現出来る程度の物だ。余が真に欲するのは貴公の魔術の腕、つまり貴公自身だ」

「ッ！なんと…… それは光栄だ」

ゲオルクは絶霧を再現出来るというアレイスターの言葉に絶句するが、実際にアレイスターが言うのだから可能なだろう。それよりも驚愕すべきはアレイスターが自分が欲しいと言ったことだ。おそらく世界で最も魔術に精通した男であろうアレイスターからそう言われるのは魔術師としては素直に嬉しかった。しかしゲオルクにはその誘いを受ける気はなかった。

「貴方の言葉は非常に嬉しい。だが俺はその誘いを受けるつもりはない」

「ほう？」

アレイスターの表情が心なしか楽しそうな表情へと変わった。薄く笑みを浮かべ、視線でゲオルクにその先を言う様に促している。「俺は既に曹操というリーダーがいる。曹操の英雄になる、そして人間としてどこまで行けるかを追求するという信念に共感してるんだ。だから貴方の誘いは断らせてもらう」

「ゲオルク……」

ゲオルクはアレイスターを目の前にしてハッキリと拒絶の言葉を口にした。曹操は嬉しそうな、驚いた様な顔をしている。すると、それを聞いたアレイスターは手を叩きながら笑い始めた。

「素晴らしい！人間としての高みを目指す、良いではないか。余は常々、最も強い生き物は人間であると思っている。貴公達の信念は実に素晴らしいな」

金色の魔人は人間の可能性を語る。その様子は実に楽しそうだ。アレイスターの怒りをかうのではないかと思い、内心戦々恐々としていたゲオルクはアレイスターのその反応に呆気にとられる。

「誘いを断られてしまったのは残念だが良き者達に出会えた。余は貴公達の行く末を楽しみにしているよ。帰るぞ、フリード」

「はいな。でもボス、俺っち来た意味あったんですか？」

「特に無いな」

「ちよーボスー！」

アレイスターとフリードはそう言うと言うと曹操達の目の前から姿を消した。アレイスターの姿が消えた瞬間、身体にかかっていた重圧が

消え失せる。二人はホッと肩を撫で下ろした。

「ふう〜 いやはや驚いた。まさか金色の魔人のお出ましとは。全く生きた心地がしなかったな」

「ああ、俺は曹操が手を出すんじゃないかとヒヤヒヤしたよ」

「いや、あの隣にいたフリードとかいう奴が睨みを効かせていたからな。手を出し様にも出せなかった。今の俺では金色の魔人はおろかあれにも敵わないだろう」

ゲオルクは曹操の言葉に驚く。何故ならフリードがそこまで強い様には見えなかったからだ。

「そんなにか？正直そうは見えなかったが……」

「軽そうな奴だったがあれは強いぞ。いくら挑んでも切り捨てられるビジョンしか見えなかった。それにあの金色の魔人の側にいる奴が弱いはずがないだろう？」

言われてみればそれもそうか、とゲオルクは思う。こんなトルコの片田舎で予想外のエンカウントをするとは思ってもみなかった二人は一気に精神力を使った気がした。

その後、曹操とゲオルクは当初の予定通りフランスへと向かうのであった。

◇

暗闇の森の中を一人の着物を着た女性が走っている。その後ろからは何人かの追っ手がその女性を追いかけていた。

「はあ……はあ……」

「ははは！何時までも逃げられるとは思うなよ！」

最悪だにやん……追っ手はまだまだ沢山いるし……

「痛っ！」

「ふはは！遂に追い詰めたぞ、SSランクはぐれ悪魔、黒歌よ！」

「チツ！」

私、黒歌は主殺しをしてはぐれになった転生悪魔。妹の白音を守るためとは言え肝心の白音には拒絶されてしまった。それから追っ手の悪魔達から逃げる日々が始まった。逃げても逃げてもそれは終

わらない。私はそこそこ強いっていう自負があったから今まで追っ手に捕まる事はなかったけれど、追っ手を殺してしまう事はあった。そのせいでどんどんはぐれとしてのランクが上がっていき、遂にSSランクになってしまった。SSランクといえば上から二つ目、その上がああ金色の悪魔のみということを考えれば最上位と言っても過言ではない。その結果、悪魔達も本腰をいれ始めたのか今までとは違い大戦を生き残った古くからの強者達を送り込んで来た。力では負けるつもりは無かったけど相手は経験が違う。徐々に徐々に追い詰められてしまったのだ。

「散々逃げ回ってくれたがそれも今日で終わりだ！Sランク以上は生死問わず。今まで貴様に殺された同胞の敵をここでとってくれる！」

「白音……ゴメンね駄目なお姉ちゃん……」

足は傷つき動かない。もうダメだ……殺されると思った時、誰かの声が辺りに響いた。

「変わった気配があると思えば……面白そうな事になってるではないか」

金髪と白髪の2人組だ。二人ともどう見てもヤバそうな感じがする。絶望が二倍になったかと思えば、今にも私を殺そうとしていた奴が悲鳴を上げた。

「あ、あ、アレイスター！な、何故だ！何故貴様がこの様な所にいる！」

「アレイスター!?!」

さつきまで余裕な態度だった追っ手の悪魔が狼狽え始めた。顔は青ざめて全身が震えている様に見える。何事！と思っただけで追っ手の口にした名前に私も驚愕と共に納得した。金色の悪魔アレイスター、そんな大物が現れるとは思っても見なかったからだ。

「ふむ、貴公は猫又か？なるほど……」

「にやーにやあ……」

アレイスターが私を見つめている。美しい金色の瞳だ。まるでその瞳に吸い込まれるような錯覚を味わう。そして、同時に猫又としての本能が私に告げた。この人は格が違う、逆らってはダメだと。

「あ、あ、アレイスター！いい、今ならその悪魔をおいて去るとならば、み、見逃してやらんこともないぞ！むしろそのままいなくなつて欲しいなくなつて……」

「外野が煩いな…… フリード、始末しろ」

「了解つすボス」

「な、何だ貴様は！やめ……ギャー！」

あつ…… 白髪に追つ手が殺されたにやん。さつきまであれだけ余裕かましてた癖に最後はかませみたいなやつだった。それでもあいつを瞬殺するなんて、白髪の方もヤバ強いにや。

「貴公、名はなんという？」

「く、黒歌だにや」

「黒歌か、貴公は何やら変わった術が使える様だな」

「仙術のことかにや？」

「仙術か…… ふむ、魔術適性も高そうだ。ならば黒歌よ、我が部下となれ」

「にや!？」

部下!?!私が金色の魔人の!?!

「なんだ？不服か？」

「そそそそんなことないにや！めっちゃ嬉しいにや！」

無理無理無理!この人からの誘いを断るなんて無理にや!

「よし、目当ての人物には断られてしまったが良い拾い物をしたな」

にや!なんか凄い上機嫌だにや!けっこう……いやかなりカッコいい……つていやいやいや!この黒歌さまに限つてそんなニコポみたいな……

白音え…… お姉ちゃんやバイのに目を付けられたかと思つたらもつとんでもないのに捕まっちゃつたにや……

◇

後日、黒歌はブラックロッジが社員旅行もあり福利厚生ももしっかりしている超優良企業?だと分かり大喜びするのだった。

第12話

私立駒王学園、近辺の私立では最も設備が整っている事で有名な学校である。また、ここの特徴としてつい数年前に共学になったばかりであるため女子の割合が大きく、女子の意見が強いという物があった。

そんな学園の中庭で一人の少年が寝そべっている。腕は空へ伸ばしており、両手は何やらワキワキと動かしていた。

「あく、おっぱい揉みてえなあ」

おっす！俺は兵藤一誠。ちよつと女の子のおっぱいが好きな高校二年生だ。おい！そこ！変態っていうな！ただでさえ学校で変態三人衆って言われてんだぞ！あ、ちなみにあと二人は松田と元浜だ。二人ともそれぞれ『セクハラパラッチ』、『スリーサイズカウンター』という恐るべき異名を持つ猛者であり、俺の心の友でもある。

学校の女子は俺達を嫌悪してるけど俺は胸を張っておっぱいが大好きだって言うね、胸だけに。大体、男なんてみんなエッチな事で頭がいっぱいなんだよ。彼氏持ちの女子ども！お前らの彼氏だっつきつとおっぱいのことばっか考えてると思うぞ。いや、そうに違いない！絶対そうだ！

「おーいーイッサー、素晴らしい覗きスポットを発見したぞ。松田が待ってるからさっそく覗きに行こうぜ！」

あの周りに人が居たら通報されるであろうセリフをはきながらこっちに向かって来る坊主頭は松田だ。その目はまるで宝物を見つけた様に輝いている。ふう、全く覗きだなんて。俺がそんな犯罪めいたことをするはずが……

「何だとーこんな事してる場合じゃねえ！早く案内しろ、松田ア！」

あるんだなく、これが。だって覗きスポットだぞ！そんな場所があるのに行かないのは男じゃねえだろ！それに松田が素晴らしいっていうレベルだ。これは期待できるぞ。ぐふふ、おっぱい達が俺を待ってるぜ！

だけど松田に案内されて着いた場所はただの倉庫だった。

「おい、松田、元浜。ここはどこが覗きスポット何だよ」

「ふっふっふ、そう焦るなイツセー。倉庫の周りを良く見ろ」

「なっ！こ、ここはまさか！」

「そうだ。この倉庫は女子剣道部の部室と隣合わせになっている」

俺は全身が雷に打たれたような気がした。素晴らしい！まさに目から鱗だ！なんでいままで気づかなかったんだ。学校にこんな覗きスポットが存在していたなんて！

「うおおお!!よっしやあ！それじゃあさっそく覗こうぜ！」

「さて、イツセー。ここ覗き穴はそこまで大きくない。だからこのスポットを見つけた俺らが最初だ。お前は後」

「まあしようがないか。早くしてくれよ！」

うー、そう言われたら黙るしかない。ここを先に見つけたのは松田達だもんな。

松田が僅かに空いている穴を覗き始めた。ちくしょう、顔がニヤついてるのが丸わかりだぜ。

「かああ！片瀬いい足してんなあ！」

「うおお！村山の胸、マジでけえ！」

何だと！村山はうちのクラスでもかなりおっぱいが大きい女子だ。壁の向こうにはあのおっぱいがあるのか！俺だって目を付けてたんだぞ！

「二人とも早く変わってくれ！」

「待て！もうちよつと、もうちよつとだけ！」

くそ、二人ともなかなか穴から離れねえ。早く退いてくれないと剣道部の着替えが終わっちゃう！

「……何か聞こえない？」

やばっ！気づかれたか？

「みんな！隣の倉庫から覗いてる奴がいるよ！」

「やべえ！ばれた！」

ちよつと騒ぎ過ぎたせいか剣道部に覗いてることがばれちゃった！俺まだ覗いてないのに〜！

「あつ！変態三人衆がいるわ！きつとこいつ等よ！」

「おい！逃げるぞ！」

『逃がすかゴラァァァ!!』

ひゃ〜！剣道部の女子が竹刀持って追いかけてくるよ！完全に女子の出す声じゃないし！目も血走ってるぞ！あれ？俺今回なんも悪いことしてなくね？

「まずいつ〜このままだと追いつかれるぞ！奴ら尋常じゃない！」

「くそ〜こうなったら……」

「お、おい！なんで俺の方むくんだ！」

まさかそんなことしないよな？俺たち親友だもんな？

「さらば相棒！俺たちのために死んでくれ！」

「イツセー！お前の勇姿は忘れん！」

「ちよつ！お前等ふざけん……グフッ！」

嘘だろ！あの野郎ども！俺を置いて逃げやがった！何が相棒だよ！

松田にタツクルされた俺は体制を崩してその場で転んだ。すぐ後ろには剣道部の追手が迫ってきている。もはや逃げたす時間も無く俺は取り囲まれた。ああ、皆さん完全にキレていらっしやる……

「あの〜、俺は覗いてないなんて言い訳通用したりは……」

『するはずないでしょ!!!』

「ですよ〜」

『天誅!』

「ギャァァァァァァァ!!!」

松田…… 元浜…… てめえ等…… 絶対にゆるさねえ…… ぞ……

◇

「う〜、身体中が痛い……」

ちくしょう、あいつ等散々人の事竹刀で叩いてくれやがって。木刀でなかっただけまじと思おうべきか…… 大体俺は今回何もして

ねえつっ—の！日頃の行いのせいでまるで信じて貰えなかったけどな！

「ふふ、相変わらず欲望に忠実な男だ」

「く、クロウ先輩—」

急に話しかけられたから誰かと思えば何時の間にか三年のアレイ・クロウ先輩が立っていた。アレイ・クロウ、名前から分かるとおりの人は外国人でありハイパーイケメンだ。同学年にも木場っていうイケメンがいるけどこの人はそいつとは違う。具体的に何が違うって言われると困るんだけど、こう何か違うんだよな。木場が女子に囲まれてチャホヤされてるのを見ると頭カチ割ってやろうかと思うけど、この人に対してはそんな事は思わない。そもそもクロウ先輩は女子に囲まれるということがない。駒王学園二大お姉さまの一人、姫島先輩がいつも一緒にいるというのもあるけどこの人の前に立つと自分がとつてもちっぽけな存在に感じるんだ。なんかこう、オーラみたいな物を感じて、エッチな事を考えるのも恥ずかしくなってくる。絶対普通じゃないよな、この人。

俺はこの人に何故かはわかんないけど気に入られたのか、こうして話しかけられることが多かった。

「間も無く時代は動き出す。それも貴公を中心としてだ。せいぜい死なんよう気をつけることだな、赤き龍の宿主よ」

それだけ言うとクロウ先輩は去っていった。

???

時代？赤き龍？いつもよく分からない事を言う人だが今日はいつにもましてよく分からなかった。

◇

「ご主人様、先程の言葉は？」

「学内ではそれは辞めろと言ったはずだぞ朱乃」

「ッ！失礼しました」

放課後の学園の廊下を二人の生徒が歩いていた。一人は姫島朱乃、もう一人はアレイ・クロウだ。もちろんアレイ・クロウというの

はアレイスターが駒王学園へ潜入する為の偽名である。朱乃がスパイとしてリアス・グレモリーの眷属になって数年後、赤龍帝の籠手の反応が感知された。そして偶然その反応があったのはリアス・グレモリーの縄張りであった。

二天龍は争いを引きつける。暇を持て余していたアレイスターは確実にこの先、何かが起こると思い駒王学園へと潜入していたのだ。

「そう遠くないうちに、あれは目覚めるであろう。人間のまま生き抜くか、それとも人外へと転生するか…… ふふ、楽しみだ」

「アレイ君が楽しそうで何よりですわ。さて、それでは私も今日もリアスの所へ行ってきましたわね」

「ああ、今日の夕食はもつ鍋だ。あまり遅くならん様にな」

「あら！それは楽しみですわ」

辺りに他の生徒の姿はない。アレイスターと朱乃の笑い声だけが廊下に響き渡るのだった。

第13話

「おい黒歌！その肉は俺っちのだろうが！」

「ふふふ、甘いじゃん、甘々だにゃんフリード！この世の中は弱肉強食！それは鍋でも変わらないわ！」

「あらあら、二人ともそんなに焦らなくてもまだまだ沢山ありますわよ」

現在、アレイスター家兼ブラックロツジアジト(50L3D2K)は夕食の真っ最中であつた。基本的に各員それぞれなんらかの任務があり全員が集まることは少ないのだが、本日は珍しく一人も掛けずに仲良くもつ鍋を突ついている。ここだけ見ればまるで休日の家族の団欒の様に感じるだろう。

フリードと黒歌は激しい肉の争奪戦をしていて朱乃は鍋を取り仕切る鍋奉行役だ。エセルドレーダは黙々とアレイスターの分をよそる専属給仕と化している。アレイスターはエセルドレーダから器を受け取りながらそれを楽しそうに眺めていた。

「フリードよ、貴公がここにいるということは墮天使が動き出したのである？それはどうなっている」

唐突にアレイスターが口を開く。現在のフリードの任務は墮天使使陣営へのスパイであり本来ならばここに居ないはずだった。黒歌と肉争奪戦をしつつもフリードはアレイスターへと報告を始める。

「そつすね、あいつ等この町で何かやるっぽいです。まあ下つ端の暴走みたいなんでアザゼルは関わってないですね。あ！あと例の赤龍帝の子に手を出そうとしてるみたいす。赤龍帝だつーことは分かってないんですけどね」

「ふむ、フリードは引き続き任務をこなせ。黒歌、禍の団のほうはどうなっている？」

フリードの報告によれば近いうちに面白い事が起こるようだ。赤龍帝にもなんらかの変化が起こるだろう。アレイスターは僅かに口角をあげ、日本酒を呷る。そのスッキリとした辛口な味わいを楽し

みながら一息ついた後、今度は黒歌へと報告を促した。

「うくん、こっちはまだあんまり動きがないにや。いろんな派閥に分かれてるから纏まりがないし…… どのいつもこいつもオーフィスの力が目当てなのよ」

「そう、我いっぱい蛇渡したのに誰もグレートレッド倒してくれない」「にや!!」

黒歌は突然聞こえた此処にいるはずのない人物の声が聞こえたため椅子から転げ落ちた。気がつけば一人の少女が椅子に座っていた。まだ幼い、外見はエセルドレーダと同じくらいにも関わらず物凄い勢いでもつ鍋を食べている。

「な、な、な、なんでオーフィスが此処にいるにやん!!」

「我、黒歌について来た」

オーフィスの言葉に黒歌はへニヤつと座り込む。心なしか猫耳もへたれていた。

「なんだ知らなかったのか。余はてつきり黒歌が連れて来たのかと思っていたぞ」

「俺つちもボスがなんも言わないからそうだと思ってたわ」

「ぐぬぬ…… 不覚だったにやん……」

どうやら黒歌以外はその存在に皆気づいているようであった。ただあまりにオーフィスが自然であったため誰も突っ込まなかったのだ。

「して、今日は何用で参った、無限の龍神よ」

「我、アレイスターにグレートレッド倒すの手伝って欲しい。聖書の神を殺したあれならば我とグレートレッドも容易く滅ぼせる」

「何度も言うがそれは断らせてもらう」

アレイスターがはぐれ悪魔に成ってからこうしてオーフィスは度々アレイスターに助力を求めてきた。しかし、アレイスターはそれを断り続けている。

「余はな、もともと貴公の事はあまり好いてはおらん。余は無限という物が嫌いなのだ。それこそ憎いほどにな。それは無限であろうと夢幻であろうと変わらん」

オーフィスは無限の龍神。かつて邪神に囚われ無限回廊に縛られていたアレイスターにとって当然好ましい物ではなかった。

「そう、でも今日は対価を持ってきた。アレイスターの組織、対価次第では手伝ってくれるって前言ってた」

「ほう、言ってみるがいい」

確かに以前、アレイスターはあまりのオーフィスのしつこさに思わずそう言った記憶があった。

無限の龍神が払う対価。自信満々なオーフィスを見ていると少しばかり興味が湧いてきた。

「アレイスターがグレートレッド倒してくれたら私の事好きにしている。それこそぐつちよんぐつちよんのねつちよんねつちよんにしてくれてもいい」

『はっ』

場にいる誰もが思わず声を出す。オーフィスの爆弾発言に場が凍った。オーフィスはアレイスターがグレートレッドを倒した暁には自らを差し出すというのだ。誰も予想だにできなかった発言に皆、空いた口が塞がらない。

「なぜその様な事を思いついた？」

代表してアレイスターがオーフィスにそう聞き返す。オーフィス自身は非常に無垢な存在であるためまさかその様な事を思いつくとは思わなかったのだ。そもそもオーフィスが自分の言ったことを理解しているかさえ怪しかった。

「ん」

オーフィスがある方向を指差した。皆、一斉にその方角を見る。するとそこに居たのはオーフィスとそう変わらない少女、エセルドレーダだった。

「アレイスターはロリコンだって言ってた。我やエセルドレーダみたいなのが好きだった」

先程の比ではない沈黙が場を支配した。瞬き一つする事が出来ない。まるで時間停止の魔術が発動したような感覚だ。しかしただ一人だけ、そう見ただけで分かるくらいに怒りを浮かべている人物が

いた。

「オーフィス、貴方にそれを教えたのは誰かしら？」

「黒歌」

「にや!?」

あまりのエセルドレーダの形相に速攻で自白するオーフィス。その冷や汗を流す姿は誰が見ても無限の龍神とは思わないだろう。

その一方で黒歌はこの世の終わりのような表情を浮かべている。「(ぐ)誤解にや! ただボスが私の誘いに乗ってこなかったからそうなのかな?」

「マスターが貴方に手を出さないのは貴方にその価値がないからよこの駄猫!!! 問答無用、お仕置きよ!!!」

「ぎにやああああ!!!」

エセルドレーダの魔術が雨あられの様に黒歌に炸裂する。

「そんな!?」主人さま! 私の様な育った女は眼中にないと!」

「それは違うぞ朱乃。余はロリが好きなのではない。好きになった女がロリだったのだ」

「それならば私にもチャンスがあるのですね!」

「ふふ、余が欲しいと思うような女になる様に励む事だな」

「よ!さすがボス!」

エセルドレーダは黒焦げになった黒歌へと更に執拗に追撃を加え、オーフィスはアレイスターにしがみつきながら涙目でプルプルと震えている。朱乃は何やら決意を新たにして燃えている様だ。フリードは謎の忠誠心からアレイスターの言葉に感動している。一言でいえばカオス空間が広がっていた。

この騒ぎは夜遅くまで続くのだった。

◇

夜の町を一人の少年が必死の形相で疾走している。そのスピードはオリンピック選手さえも凌駕しているかもしれない。

「糞!なんでこんな事になったんだよ!」

少年、兵藤一誠はそう悪態をつく。こここの所イツセーの身には不可解な事ばかりが起きていた。朝に異常に弱くなる、今のよう夜に身体能力が極端に増加する、そして極めつけはーっつい先日できた彼女に殺される夢だ。その次の日から彼女の存在は忽然と消えた。携帯からはメールアドレスが消え、友人達は誰一人としてそれを覚えていた者はいなかった。

「なんだ？・鬼ごっこはもう終わりか？」

「ひっ！」

イツセーの目の前を空から降りてきた男が遮る。

今日は連日の不思議な現象に疲労していたイツセーを見兼ねた友人達が開いてくれたAV鑑賞会だった。その帰り道、突如として羽の生えた男に襲われたのだ。羽なんて物が生えている時点で明らかに普通じゃない。イツセーは必死に逃げようとするが、相手は空を飛ぶことが出来る。そのスピード差は歴然でありその結果が今の目の前の光景であった。

「その困惑した様子…… 貴様まさかはぐれか？」

目の前の男がなにやらボソボソ喋っているがなんの事かイツセーは全く理解する事ができない。体力は既に尽き、膝は震えていてもう逃げられそうになかった。

「はぐれなら殺してしまっても問題ないだろう。些細なことで計画が狂っても困るしな」

そう言う男の手に光の槍が現れる。それを見た瞬間、イツセーは猛烈な悪寒に襲われた。光の槍がとてつも無く危険であることが自然と理解できる。それにイツセーにはその槍に見覚えがあった。件の彼女が夢の中で自分の事を刺し殺した槍と一緒に。そういえば夕麻ちゃんもこの男と同じ翼が生えていた気がする、そんな事をイツセーが考えていると男が槍を投げた。上がった身体能力のおかげか目で槍を捉える事は出来るが、一高校生でしかないイツセーは槍自体をよける事はできない。

「ぐ……あああ……」

イツセーの腹に槍が突き刺さり、尋常ではない痛みが全身を襲

う。たまらずイツセーは膝をついた。明らかに普通ではない痛みだ。同じように包丁で刺されてもこれほどの痛みはないだろうと思えるほどの痛みであった。

「痛いか？痛いであろう。お前たち悪魔にとって光は猛毒だからな。しかし、意外と頑丈だな。一撃で死ぬと思っただが」

男は再び手に光の槍を出現させる。マズイっ！と思うがあまりの激痛に身体が動かず逃げる事が出来ない。

「それでは今度こそさよならだ」

「それは少し待ってもらおうか」

「あ……せん……ぱい……」

男が槍を投げようとした瞬間、特徴的な声と共に見慣れた先輩が現れた。神出鬼没な人だがまさかこの場所にまで現れるとは思っても見なかった、朦朧とする意識の中でイツセーはそう思った。

「なんだ貴様、人間か？」

「生憎だが、まだ物語はプロローグさえ終わっていない。ここで兵藤一誠を死なせるわけにはいかないのだ」

「意味の分からない事を…… 邪魔をするならば貴様からだ」

男がアレイスターへと槍を投げる。それをみてアレイスターは心底つまらなそうに呟いた。

「このまま逃げるのならば見逃したが…… 敵対するのならしょうがない。ン・カイの闇よ」

アレイスターの手から黒い重力球が発射された。ン・カイの闇——それはかつて宇宙の爆発さえも耐えるデモンベインの装甲を容易く削り取った魔術だ。

重力球は簡単に光の槍を飲み込み、そのまま男を消滅させた。断末魔を上げることさえ出来ない、あまりにも呆気ない最後だった。

「無事か？兵藤一誠よ」

「は……はい……」

「ふむ、どうやら喋るだけの元気はある様だ」

イツセーはなにが起きているのか全く分からなかったが見知っ

た人物に声を掛けられ少しばかり落ち着く事ができた。ただ落ち着くと今度はまた腹の痛みにのたうちまわる事になる。

「無様な様だがまあそれはしょうがないか。しかし、かなり豪快に穴が空いているな。見せてみる」

アレイスターがイツセーに手を伸ばした瞬間、

「その子に触らないで!!!」

「おっと」

アレイスターの目の前を消滅の魔力を帯びた魔力弾が通り過ぎる。

「いやはや懐かしい物を見せてもらった。こんばんわ、グレモリー家の姫よ」

紅い髪の少女がイツセーをかばう様にアレイスターの前に立ち塞がった。その目は厳しくアレイスターの事を睨みつけている。

「貴方……まさか同じ学年のクロウ君? 一体その子に何をしたのかしら」

「勘違いして貰っては困る。余は兵藤一誠を助けてやったのだよ」

アレイスターは紅髪の少女、リアス・グレモリーに先程の墮天使の羽を見せつける。リアスはそれを見て驚いたように声を上げた。

「ちよつとまって! 貴方が墮天使を倒したって言うの?!」

「そうだと言っている。さて、もう夜も遅い。余はこれで帰らせてもらうぞ」

「ちよ、ちよつと待ちなさい!」

「余にかまっついていて良いのか? 兵藤一誠が死ぬぞ?」

「あくもう! 明日学校で詳しく聞かせて貰うわよ!」

今にも死にそうなイツセーをみて重要度がどちらか高いか判断したりアスはアレイスターを引き止めるのを諦めイツセーへと駆け寄った。

「ふふ、ようやく時代が動き始める。ヒーローとヒロインが出会う、典型的なボーイ・ミーツ・ガールだが……王道だからこそ面白い。兵藤一誠はまだまだ弱いがやはりヒーローというものはそうで無くてはならん」

夜の町を一人、アレイスターが歩く。

「奴がこれから何処まで成長するか…… 奴には大十字九郎と似た雰囲気を感じる。できれば大十字九郎のように余の所まで登ってきて欲しいものだ」

アレイスターはこれからを想像し笑いながら消えて行くのだった。

第14話

「やあ、兵藤一誠君はいるかな？」

「ああ、俺は此処だ」

イツセーが羽の生えた男に襲われてから一夜明けた放課後、学校のイケメン王子こと木場祐斗がイツセーの教室へと訪ねてきた。

昨日の夜の不可解な出来事、それは夢でもなく現実だった。謎の男に腹を貫かれた事も現実で、その男を学校の先輩が殺したことも現実。にわかには信じられないが朝の出来事がそれを証明していた。

「この場ですぐ説明してくれるって訳じゃないんだよな？」

「そうだね、僕はあくまで案内役。それを君に説明するのは部長、リアス・グレモリー先輩の役目さ」

リアス・グレモリー、鮮やかな紅の髪で抜群のスタイルの先輩。学園の二大お姉さまの一人でもあり、イツセーからしたら高嶺の花もいいとこだ。その人が今日の朝起きたら同じベッドで全裸で寝ていたというのだからイツセーはそれはそれは驚いた。ちなみにその時に人生初の生乳を見るという衝撃的な出来事もあったのだがそれは割愛する。

そのリアス・グレモリーが昨晚の事をすべて説明する、使いを遣るから放課後まで待てと言うのだからイツセーは渋々待っていたのだった。

「さあ、ついて来てくれ。部長の元に案内するよ」

ついに来たか、これでようやく最近の謎が解ける、イツセーはやる気持ちを抑え木場の後を追う。周りの女子が木場×兵藤とか兵藤×木場とか何とか言っているがそんな事は今のイツセーの耳には全く入ってこなかった。

◇

「ここに部長がいるんだよ」

木場にイツセーが連れて来られたのは旧校舎の一室。旧校舎などこんな機会が無ければ来る事はないためイツセーはつついキョロキョロと辺りを見回してしまう。旧校舎は新校舎と違って木造二階建てで外から見る分には非常に寂れていた。しかし、こうして中から見ると先程とは全く異なる印象を受ける。旧校舎特有の幾重にも張り巡らされた蜘蛛の巣や積もった埃が目に入ることはなく、廊下は綺麗に掃除されている。木造という所を目をつむれば現役で使用していると言われても違和感がなかった。

「部長、連れてきました」

「ええ、入ってちょうだい」

木場が目の前扉をノックする。するとすぐに扉の向こうから朝聞いた声と同じ声が返ってきた。扉のネームプレートにはオカルト研究部と書かれている。オカルト研究部、明らかに怪しい雰囲気だ。一抹の不安を感じるが此処で帰ったら真実を知る事が出来ない。イツセーは意を決して部屋の中へと入るのだった。

「遅かったな、兵藤一誠」

「にやあく」

「って何やってるんですか先輩!」

オカルト研究部の部室へと入ったイツセーの目にまず飛び込んできたのはソファアに座り、学園のアイドル塔城小猫を膝に乗せ撫で回しているアレイスターの姿だった。あまりの予想外の出来事に思わずツツコミを入れてしまう。こっちは覚悟して入ったというのに……そう思わずにはいられないイツセーだった。

「何と言われてもな…… ペットの猫を撫でているようなものだ」

「にやくん」

「いやいやいやいー!」

アレイスターは何だそんな事か、と言いながらも小猫を撫でるのを止める事はない。小猫は小猫で非常に気持ち良さそうにしてされるがままになっている。普段学校で見せる無愛想な小猫しか知らないイツセーにとってその姿は衝撃的であった。どうやらそれは木場も同じ様で目を丸くして驚いている。同じ部活の木場ですらこの驚

き様だ。これはかなりレアな光景なのだろう。

「またえらく懐いてるね小猫ちゃん？」

「アレイ先輩に撫でられてると、何処かの王様のペットになった気がします」

確かに小猫の言うとおり、今のアレイスターと小猫の姿は自分のペットを可愛がる王とそのペットの様だ。驚くべきはその違和感の無さ。これも全てアレイスターの纏う雰囲気の所為だろう。

そこでイツセーは肝心のリアス・グレモリーが居ない事に気がついた。先程部屋に入る時には声が聞こえたので居ないはずはない。一体何処に居るのだろうかと部屋を見回す。先程は衝撃的な光景に目を奪われたが、なるほどオカルト研究部の部室はその名に相応しく、胡散臭い魔方陣や文字が至る所に書かれている。

すると部屋の奥からシャーっと水の流れる音が聞こえてきた。そちらの方へと視線を向けてみれば今度はシャワーカーテンが目に入ってくる。こんな部室にシャワー完備!!と思うがそんな事はこれからの話に比べれば些細な事だ。しばらくするとシャワーが止まりそこから二人の女性が出てきた。一人は言わずと知れたリアス・グレモリー、もう一人は今の時代では貴重なポニーテール保持者、姫島朱乃だ。

「ゴメンなさいね、昨晚は色々忙しくてシャワーを浴びれなかったから今汗を流してたの」

そう言いながら出てきたリアスの髪の毛はほんのり湿っていて実に扇情的だ。イツセーはいつい先程のシャワーシーンを想像し自然と顔がだらしなくなる。健全な男子高校生な上に性欲の塊のよくなイツセーだ。それもしょうがない。小猫がジト目でイツセーを見ているが、小猫は小猫でアレイスターに撫でられて目以外はだらしなく緩みまくっているのとお互い様だろう。

「リアス・グレモリー、貴公が余達を呼びつけたのだろうか?ならば早く本題に入るがいい。それと朱乃、茶だ」

「分かってるわよ。待たせて悪かったわ。それにしても貴方くつろぎ過ぎじゃない?」

「何を言う。余は全くの自然体だ」

「はあ、頭が痛いわ」

正直この部屋の主は誰かと聞かれたらほぼ全員がアレイスターだと答えるに違いない。しれっと朱乃に茶を要求するアレイスターの態度はそれ程までに堂々としていた。

アレイスターに促され、ようやくため息を尽きながらリアスが話を始める。

「これで全員揃ったわね。それじゃあ兵藤一誠君、アレイ・クロウ君。いえ、イツセーとアレイ」

「は、はい」

「私たちオカルト研究部は貴方達を歓迎するわ、悪魔としてね」

イツセーはリアスの言葉にポカンとしている。対するアレイスターは只々笑みを深めるばかりであった。

◇

「粗茶です」

「あ、どうも」

朱乃の入れたお茶を飲んで一服、イツセーはしばし考える。先程リアスは悪魔と言った。それは一体どういう事なのか。頭のおかしいオカルトかぶれか、はたまた本当に悪魔という種族なのか。考えても分からないので結局イツセーは話の先を待つ事にした。

「イツセー、驚かないでね。私たちは悪魔なの」

「はあ」

正直そう言われてもいまいちピンとこない。イツセーの想像する悪魔と言えば羽や角が生えている異形の存在だ。それに比べて目の前の人物はどう見ても普通の人間と変わりない。想像する悪魔の姿とは似ても似つかなかった。

「信じてなさそうね？・じゃあこんなのはどうかしら——天野夕麻」

その言葉を聞いた瞬間イツセーの目が大きく見開く。天野夕麻、

それはイツセーの彼女であり突如として消えてしまった者の名前だ。思い返してみればこの少女との出会いが全ての発端だった気がした。

「詳しく…… 詳しくお願いします」

「天野夕麻、この少女は間違いなく存在したわ。朱乃」

「はい」

朱乃が懐から一枚の写真を取り出した。そこには一人の少女、天野夕麻が写っている。よく見れば昨晚の男と同じ様に背中からカラスの様な黒い羽が生えている。

「この子、いえ、これは墮天使。貴方にも分かるでしょう？これが人間でない事は」

イツセーは頷く。リアスの言葉通りにそれは一目瞭然だった。何処に羽の生えた人間がいるというのだ。

「これは元々貴方を殺すために接触した。目的を達したから周りの人間から自分の記憶を消したのよ」

「でも先輩！俺生きてますよ！」

「それはこれから説明するわ。貴方はその身に神器と呼ばれる物を宿している。恐らくその所為で狙われたんでしょう」

「そんな！たったそれだけで！」

「二誠君、よく聞くんだ。神器は特定の人間に宿る規格外の力。その力は墮天使や悪魔をも凌駕する可能性がある。その墮天使は君の力を恐れたんだろう」

取り乱すイツセーを木場がなだめる。落ち着いてよく考えてみるとそういえば神器という物はイツセーにも聞き覚えがあった。天野夕麻に刺された時、確かその様な事を言っていた気がする。

「イツセー、手をかざして頂戴」

「手ですか？」

「そう、そして貴方が最も強いと思う物を想像するの」

「強い者……ドラグ・ソボールの孫空悟かな？」

「それじゃあ次にそれが最も強く見える姿を真似るのよ」

「えっ」

「早くしなさい」

イツセーは渋々立ち上がった。正直言つてこれはかなり恥ずかしい。もう物語の登場人物の真似事をするような年齢ではないのだ。しかし周りの人間の顔は真剣であったため嫌ですとは言える雰囲気では無い。

「すくは……」

かつて幼少の頃、イツセーはドラゴン波が撃てると思い込み一心不乱に練習していた事があった。今思い返して見れば馬鹿な事をしていたと思う。だがその時はきつと練習すればいつかは出来ると信じていたのだ。

あの懐かしき日々から数年後、身体も大きくなり少年はそろそろ青年に差し掛かるうとしている。もう昔の様な無邪気な心は忘れてしまった。だが今だけは、そう今だけはあの頃の気持ちを思い出そうではないか。

構えを取ろうとすると驚く程に身体がスムーズに動いた。何百、何千と繰り返し返したその動きはしっかりと身体が覚えていたのだ！その事実自然と笑みが浮かぶ。

深く深呼吸をして精神統一をする。もう後戻りは出来ない。ならば最高のドラゴン波を演じて見せようではないか、イツセーは遂に覚悟を決めた。

「ドゥラ〜ゴ〜ン〜波あああああ!!!」

やった！やりきったのだ！ハリウッドなど目では無い。この時、イツセーは本物の孫空悟になったのだ。

「さあ、目を開けて。魔力漂うこの空間なら神器も容易く……つてあら？」

「えー!!!何も起こらないじゃないですかあ！」

「おかしいわねえ、どうしてかしら？」

「そんなあ!!!」

男イツセー、17歳にして渾身のドラゴン波であった。その結果が何も起こらないなど流石に不憫過ぎる。リアスも思惑と違ったのか不思議そうに首を傾げている。

すると此処にきて今まで沈黙を貫いていたアレイスターが声を

上げた。

「やり方がヌルいのだよりアス・グレモリー。こういう男は多少強引なほうが上手く行くものだ」

「ちよ、ちよつとなにするのよ」

アレイスターは立ち上がりおもむろにイツセーの腕を掴む。リアスが慌てて止めようとしたがアレイスターはそれを無視。イツセーに魔力を流し始めた。

「最初からこうすれば早かったのだ」

「アバババ!?アババ!?アババババババ!?」

「イツセー!?大丈夫なの!?イツセー!?」

数秒後、アレイスターが手を話すとイツセーは崩れ落ちた。慌ててリアスが駆け寄る。

「イツセー無事☒意識はある!!」

「は、はい……… なんとか………」

「見てみる。上手く行っただではないか」

「あつ!本当だわ!」

アレイスターの言葉通りイツセーの左腕には赤い籠手の様なものがはめられていた。

「うわ!なんじゃこりゃ!」

「イツセー、それが神器よ。貴方はそれを危険視されて殺されたの」

「あの……… それじゃ俺が殺されたのも本当って事ですか?」

「ええ、あの時私は貴方に召喚された。そこで死にそうな貴方を見つけてその命を救うことにしたのよ。ほら、このチラシ。貴方も見覚えがあるでしょう?」

リアスはそう言つて魔法陣の書かれたチラシを取り出す。それは確かにイツセーにも見覚えがあった。たしか駅前で配られていたものを貰った記憶がある。

「イツセー、貴方は私、リアス・グレモリーの眷属として生まれ変わった。私の下僕悪魔としてね」

次の瞬間、イツセーとアレイスター以外の全員の背中から悪魔の翼が生えた。一瞬、ギョツとするがイツセーも恐る恐る自分の背中を

触ってみると確かに手のひらから翼の感触が伝わってきた。信じたくないが手のひらの感触が確かに現実だという事を伝えている。

「……マジですか?」

「おおマジよ。さあ、改めて紹介するわ。まずは、祐斗」

「僕は木場祐斗。分かっているかもしれないけど君と同じ二年生。僕も悪魔さ」

「一年、搭城小猫。悪魔です」

「三年生、姫島朱乃ですわ。この部の副部长でもあります。私も勿論悪魔ですわ」

「そして私がこのオカルト研究部、部長。グレモリー家リアス・グレモリーよ。爵位は公爵。よろしくね、イツセー」

「こ、こちらこそよろしくお願ひします!」

まさか悪魔に転生するとは…… 次々と発覚する衝撃の事実
にイツセーの頭はもうパンク寸前となっている。だが、どうやらண்டும்もない事になったということだけは理解する事ができた。

「イツセーには悪いけど…… 本題は此処からよ、アレイ」

「ようやくか、余は退屈過ぎて帰ろうかと思っただぞ」

実際、アレイスターはイツセーが神器を発現させたのを見て満足していた。正直後の事はどうでもいいと考えていたのもう飽きていたのだ。ぶっちゃけあと少し遅ければ帰っていただろう。

「アレイ、単刀直入に聞いわ。貴方は何者なの? 貴方から感じる雰囲気は人間の物。それなのに昨晚貴方は堕天使を倒していた」

「ふむ、余が何者か…… 人間だといえれば人間であるし、悪魔だといえれば悪魔でもある。だがそのどちらでも無いといえればそれもまた正しい」

「誤魔化さないで!」

リアスが声を荒げるがアレイスターの態度が崩れることは無い。「別段誤魔化している訳ではないさ。どれも本当のことだが、まだすべてを語るには時期尚早だ。だが敢えて言うならそうだな…… 余はただの魔術師、とだけ言っておこうか」

言いたい事を言い切ったのかアレイスターは帰ろうと立ち上が

りドアへ向かった。しかし、木場と小猫が扉の前に立ちふさがる。リアス達にしてみれば当然納得いかなかったのだ。

一方、邪魔をされているアレイスターは少々不満げだ。

「残念だけどはいそうですかと帰す訳にはいかないわ。ここは私の領地ですもの。不穏分子を放って置くはずがないでしょ？さあ、怪我したくなかったら素直に白状しなさい！」

「ふふ、ははは！余が怪我か！いいだろう、出来る事ならやってみるがいいい！」

「っ！祐斗！」

「はい！申し訳ありませんが少し眠ってもらいます！」

売り言葉に買い言葉でリアスが木場にアレイスターを止める様に命令を出した。木場は自身の神器、魔剣創造で創った剣を片手にアレイスターへと突貫するが、対するアレイスターは薄く笑みを浮かべ動く様子はない。

「とった！」

「なるほど、魔剣創造か。珍しい物を持っている。だが……まだまだ練度が足らんな」

「そ、そんな馬鹿な！」

木場の振るった剣はアレイスターの人差し指一本に止められてしまう。木場は目の前の光景に驚き足を止めてしまった。目の前の男からは多少不思議な雰囲気を感じられる。だが悪魔である自分の剣を止められるとは思っても見なかったのだ。

「実戦で止まるのは感心せぬぞ」

「ぐわあああ！」

「祐斗！」

自分より強い相手を前に足を止めるのは愚の骨頂。アレイスターが木場の剣にでこぴんを一回、それだけで剣は粉末化し生じた衝撃波によって木場は吹き飛ばされた。木場はなす術もなく壁に叩きつけられてそのまま意識を失う。まさか自慢の騎士がでこぴんでやられるとは思わなかったリアスはその光景に絶句した。

「まだやるか？」

「わ、私はグレモリー家次期当主として……」

気丈にもそう言い放つがリアスの声は震えている。目の前で一瞬にして木場が倒されてしまったのはリアスにとって予想外の事であった。相手は一人、容易く捉えられるはず、その考えが甘かった。アレイスターの力を見誤ったのがリアスの最大のミスだ。いや、そもそもアレイスターに挑む事自体が誤りであったのだ。

「心意気は認めるが勇猛と無謀は別物だ。それに余は別に貴公らと敵対するつもりは無い。その証拠に兵藤一誠を助けてやっただろう？」
「ッ！」

アレイスターの言葉にリアスは狼狽える。ここ最近、自分の領地への墮天使の無断侵入など問題が起きていた。此処ら一帯を任されているという責任もあり、リアスはそうやすやすとアレイスターの事を信用するわけにはいかなかったのだ。それは責任者としては当然の行動だろう。

だがアレイスターの言葉通り、アレイスターが居なければイツセーは死んでいたのも事実。リアスは何が最善手なのかを頭の中で必死に考える。

「先輩……」

「……………はあ。イツセー、そんな目で見ないで頂戴。私が悪かったわ」

結局はイツセーの不安そうな目にリアスが折れた。子犬のような目つきでジツと見つめられるのは中々にくるものがある。こういう甘さがリアス・グレモリーの短所でもあり長所でもあるのだろう。

「取り敢えずはアレイ、貴方の言葉を信じる。私もすこし神経質になり過ぎてたようだよ。でもいつかは貴方の事を教えてもらおうわよ」

「ああ、そう遠くない内に分かるだろう。それまで楽しみにしておくことだ。それでは余は失礼する」

「あ、あの！クロウ先輩！俺の事助けてくれてありがとうございます！ごさいます！」

「礼はいらんさ。時代は既に動き始めた。これから兵藤一誠、貴公の歩む道は険しくなるぞ。日々挫けぬ様に精進する事だ」

一旦振り返りそれだけ言うとアレイスターは出口へと向かう。
今度はアレイスターの行く手を阻む者は誰も居なかった。

第15話

自身が悪魔に転生したという衝撃の事実が発覚してから数日、イツセーは毎晩自転車に乗り市内を爆走していた。手に持つ携帯機器に表示された家のポストへとチラシを投函してはまた次の家へと向かう。悪魔のお仕事、と言えば聞こえは良いかもしれないがやっている事はただのチラシ配りだ。

チラシ配りが悪魔の仕事？と思うかもしれないが、イツセーはまだ悪魔に成り立ての新人である。いうなればこのチラシ配りは新人研修であった。勿論これが終われば悪魔の本来の仕事である契約取りが待っているのだ。

あの日、リアスはイツセーに言った。悪魔として功績を上げ爵位を貰えばハーレムも夢ではないと。それを聞いたイツセーのテンションの上がり方は尋常では無かった。それからのイツセーはまさにチラシ配りの鬼。今までリアス達の使い魔が一週間に配っていた量のチラシを一晩で配り切って見せたのだ。

一方、アレイスターといえればあれからオカルト研究部に入り浸っていた。朱乃が入れたお茶を飲みながら小猫を撫で回し雑談をして飽きたら帰るといふ気ままな生活。リアスもアレイスターに対しては強気に出る事が出来なかった。それでもなんとか頼み込み、オカルト研究部に籍を置く事だけは容認させたのだった。

そんなこんなで研修も終わり、今日はイツセーの契約取り初日だ。

「さあ、イツセー。魔法陣の準備が出来たわ。中央に立ちなさい」

「は、はいー」

「イツセーに予想外のチラシ配りの才能があったから思ったより早く契約取りをさせてあげられるわ。今日イツセーに向かってもらうのは小猫に入った二件の予約の内の一つよ。そう難しい内容では無いはずだから気楽に行ってきてちょうだい」

「分かりました」

「この魔法陣は貴方を依頼人の下へ転移させ、依頼が終わればこの部屋に戻してくれるわ。到着後はマニュアルを見て頑張りなさい。さ、もうすぐ転移が始まるわよ」

「おおー！」

魔法陣の準備をしていた朱乃とリアスが離れると、魔法陣が青く輝き始める。こういった類の物を見ると実際に悪魔になったのだなという実感が沸き起こってきた。

魔法陣がより一層輝く。イツセーは思わず目をつむった。次に目を開いたら依頼人の目の前にいるのだろう。明るい未来の為の第一歩だ。しっかりと契約をとってみせる！そう意気込んでイツセーは

目を開い……………

「つて、あれ？」

目を開くとそこは見慣れたオカルト研究部。どういう事なのだろうか？何か不備があったのか？イツセーは思わずリアスの方へと振り向く。するとリアスは額に手を当て困り顔をしていた。

「イツセー」

「はい」

「どうやら貴方は魔法陣を介して依頼人の下へは行けないようなの」「ん？」

　　どういう事なのだろうか。リアスは先ほど眷属悪魔なら誰でも魔法陣を利用できると言っていたはずだ。説明を求めようとイツセーが他の部員の顔を見ればリアスと同様、皆困った顔をしている。「魔法陣は一定の魔力が必要なんだけど……………　　これは高い魔力なんて必要ないわ。それこそ子供でさえ出来るもの」

「つ、つまり？」

「つまり、貴方の魔力は子供以下。低レベルすぎて魔方陣が反応しないのよ」

「えええええええー！」

　　絶句するイツセー。魔方陣が利用出来ない、つまりイツセーは自らの足で依頼人の下へと向かわなくてはならないのだ。今までこん

な悪魔がいたのだろうか？

「……無様」

「ああ、無様だな」

「あふん！やめて！小猫ちゃんもアレイ先輩もそんなゴミを見る目で見ないで！」

二人分の強烈なジト目がイツセーに突き刺さる。しかし、いくらイツセーが嘆いた所でどうしようもない。無い物は無いのだ。

「イツセー！依頼人を待たせるわけにはいかないわ。しようがないから今から自転車で現場に向かいなさい！」

「う、うわああああん！がんばりますうううう！」

イツセーは涙を流しながら、チラシ配りの時同様、自転車に跨る。こうして、イツセーの契約取りは初日から難航する事となるのだった。

◇

「…………」

「あ、あの…… 部長？」

イツセーは産まれたての子鹿の様にプルプルと震えている。イツセーの眼前には明らかに怒っているリアスが立っていた。

あれから数日、イツセーは二回契約取りを行った。しかし、結果は二回とも破談だったのだ。

「二回目は漫画のバトルごっこ、二回目は魔法少女のアニメと一緒に観てたですって？」

「あはは、前代未聞だよ」

「うう、反省してます。すみません」

流石の木場もこれには苦笑するしかない。本来、依頼人と契約を結べなかった場合すぎさま帰還する、というのが普通のことなのだ。

「……契約後、依頼人にはアンケートを書いてもらうことになっているの。『悪魔との契約はいかがでしたか？』って」

リアスが二枚のアンケート用紙を取り出してイツセーに文面を

見せつける。

「二つ目は『楽しかったです。こんなに楽しかったのは初めてです。イツセー君とはまた会いたいです。次はいい契約をしたいと思いません』二つ目は『楽しかったによ。またミルたんは悪魔君と魔法少女ミルキースパイラル7オルタナティブをみたいによ。次はミルキーシリーズ一気見をしたいによ』」

「森沢さん……ミルたん……」

イツセーは契約は結べなかった。しかし、依頼人は満足している。流石のリアスもこうなるとは予想する事が出来なかった。

「はあ、こんなアンケート初めてでどうしたら良いか分からないわ」

「まあ、そう怒るな、リアス・グレモリー。初心者なのだ。まだまだこれからだろう」

「アレイ先輩……」

ここで、リアスに怒られる十二人のアンケートにより泣きそうになっていたイツセーにアレイスターが助け舟を差し出した。

「しかし、7オルタナティブか……このミルたんという者はなかなか分かっていないか。だが余からすれば無印の4が一番だかな」

「ん？んんん?!?!」

あれ？おかしいぞ？今、目の前の人物から放たれるはずのない言葉が聞こえたような……イツセーは思わず己の耳を疑う。

「そもそもとして魔法少女ミルキーは無印が本編でありオルタナティブが番外編である。本編が王道的な魔法少女であるのに対し、番外編であるオルタナティブはいまいち盛り上がり欠けるといえる点がある。いや、決して余もオルタナティブを貶している訳ではないぞ。本編とは異なり、明確な敵が出てこなくダラダラとした日常物である分、安心して見れるというのは大きなポイントだ。脇役やライバルの活躍が多いというのもオルタナティブの人気の一つであろう。さて、少々話はそれだが次に何故余が無印ミルキー4を押すかという事を話そうと思う。無印ミルキー4の最大の目玉と言えやはりミルキーのライバルであるダークミルキーの初登場作品であるというこ

とだろう。1〜3まで順風満帆であったミルクキーがダークミルクキーと出会うことにより初めて挫折を味わう事になる。ミルクキーとダークミルクキーが『ストップ！ストップ！ストップです！先輩！』む、まだ十分の一も話していないぞ」

「聞き間違いじゃなかった！いきなり何を言い出すんですか！」

まさかアレイスターが魔法少女を語り出すとは思わなかったため、イツセーは呆然とするが我に返ると慌ててアレイスターを止めた。恐らく、アレイスターのあの様子では止めなければ永遠と魔法少女トークが続いていただろう。オカルト研究部の面々も信じられないような物を観たかのような顔をしている。

「何だ？余がこのような物に造詣が深いのがそんなにも奇妙か？」

アレイスターの言葉に朱乃以外の皆が激しくブンブンと首を縦にふる。アレイスターと魔法少女、普通だったらどう考えても結びつかない両者だ。

「余ほど永く生きていればな、こういったサブカルチャーにも手を出すほど暇を持て余してしまうのだよ。まあ、魔法少女については友の影響であるがな」

「はあ」

イツセーは分かったような分からないような生返事を返す。イツセー達はアレイスターについて知っている事は殆どない。それゆえ初めて分かった事が浮世離れたアレイスターの趣味が魔法少女だったのというのがあまりに衝撃的だったのだ。

「さて、兵藤一誠。いつまでもそうしている時間は無いのではないか？」

「うわっ！本当だ！もう行かなきゃ次の契約に間に合わねえ！それじゃあ部長！行ってきます！」

「イツセー！今度はしっかりと契約を結んで対価をもらってくるのよ！それが悪魔としての基本なのだからね！」

はい！と元気の良い返事をしてイツセーはオカルト研究部の部屋から飛び出して行った。新たな依頼人の元へと向かうのだ。

「全く。面白い子ね、イツセーは」

イツセーを見送りながらリアスはそう呟いた。

その後は続々と木場、朱乃も魔方陣で契約取りへと向かう。そんな中、小猫がアレイスターの服の裾を掴み話しかけた。

「……アレイ先輩」

「何だ？ 搭城小猫」

「私はミルクィ6オルタナティブが好きです」

「なるほど。貴公もまたミルクィニストであったか……」

『魔法少女ミルクィ』それは冥界、人間界問わず人々を魅了して止まない超人気作品なのである。

こうして今日もまた、ミルクィの輪が広がるのだった。

◇

学校からの帰り道。既に日が暮れて暗くなった市街地を一人、アレイスターが歩いていった。

「フリード、新たな報告か？」

アレイスターがポツリと声を出した。辺りにはひと気がある様子は無い。第三者から見ればただの独り言の様に聞こえるかもしれない。だが、それは誤りだ。

アレイスターの声に呼応する様に一陣の風が吹く。すると何時の間にか一人の男がアレイスターの眼前に跪いていた。

「いえ、別に緊急事態って訳じゃ無いんですけどね。墮天使達が本格的に動き出す様で。どうします？ 目障りなら今すぐサクツと始末しちゃいますか」

「ふむ……」

アレイスターは顎に手を当て暫し考え込む。そして数分後、考えが纏まったのか口を開いた。

「そうだな、その墮天使どもにはリアス・グレモリー達の当て馬になって貰おうか。フリード、お前はその者達の所へ潜り込んでおけ」

「なるほど、ボスも悪いお人っすね。それで？ 俺っちも赤龍帝の子に

「ちよつかい出しても？」

「構わん、だが殺さぬ様にな」

「さっすがボスう！あつ、これは全然関係ない話なんですけどね。その墮天使達の所に一人、神器持ちの子がいるんすよ。その子がまた不憫な子でして。理不尽に教会の糞共に異端審問されて教会から追い出されたつてのに健気に神を信じてがんばってるんすよ」

「ふむ」

「俺つち的にはもう見てるだけで涙がちよちよぎれそうになるからどうにかしてあげたいんですけど……」

「まあそれについては好きにするが良い。自らが最善であると思う行動をしろ」

「了解っすー！」

やはり自分の主は最上だ。フリードはアレイスターへの忠誠を再確認して元気良く返事をする。正直、フリードのそれはもう盲信の域まで達しているのだがフリードの人生を垣間見ればそれかもしれない事なのだろう。

盲信的な部下というのは得てして、ある種の扱いずらさというものがある物だ。しかし、アレイスターには既にエセルドレーダがいた。エセルドレーダはアレイスターに対しては盲信を通り越して狂信の域である。アレイスターの為ならば即座に地球をぶっ壊すレベルだ。なので、アレイスターにしてみれば一人増えようが今更な話なのであった。

第16話

「二度と教会に近づいちゃ駄目よ」

イツセーが金髪美少女シスターと知り合ったその日の夜。リアスは真剣な顔をしながら、強くイツセーに念を押していた。

「私たち悪魔にとって教会は敵地。踏み込めばそれだけで神側と悪魔側の間で問題になるわ。いつ光の槍が飛んできてもおかしくなかったのよ?」

「そ、そんなにですか!」

イツセーはリアスの言葉に身体を震わせる。確かに教会に近づいた時、悪寒が走るのを感じた。やはりそのまま入らなくて正解だったのだ。あの光の槍を食らうなんて二度とゴメンである。絶対に教会には近づかないようにしよう。イツセーは固くそう心に誓うのだった。

「教会の関係者にも近づいては駄目よ。特に『悪魔祓い』は我々の仇敵。もし神の祝福を受けた悪魔祓いに滅ぼされたら完全に消滅する。

——無。完全なる無よそれがどういう事か分かる?」

「無……ですか」

イツセーはかつて堕天使に光の槍で刺された時に感じた感覚を思い出す。単純に死ぬのとは違う。耐え難い激痛と共に自分という存在が消えてゆくのを感じた。今思い出してもゾツとする。あれが無になるということなのだろう。

「ちよつと怖がらせ過ぎたかしら?とにかく、そういう訳だから今度からは気をつけてね?」

「あらあら。お説教はすみましたか?」

「おわっ!」

突如、背後から話しかけられたイツセーは驚き変な声がでる。

「あら?朱乃。どうかしたの?」

「討伐の依頼が大公から届きました」

◇

——はぐれ悪魔。主を殺し逃げ出した者。自らの力を使い暴れまわる者。それ等を総称してはぐれ悪魔と呼ぶのだ。

基本的にはぐれ悪魔は害となる。従って見つけ次第、元主か他の悪魔が消滅させる事となっているのだ。それが悪魔のルールである。それは他の勢力でも同じ事で、天使、墮天使達もはぐれ悪魔を見つけ次第殺すようにしている。

また、はぐれ悪魔には懸賞金がかげられる事が多い。実はブラツクロツジの主な収入源ははぐれ悪魔討伐なのである。はぐれ最強のアレイスターの組織がそんな事するのは可笑しく思うかもしれないが、これがなかなかどうして良い金額になるのだ。

今回、リアス達の元へと届いた依頼もそういった類の物であった。

「……………血の臭い」

小猫がそう呟き、制服の袖で鼻を覆う。

時間は既に深夜。周囲には背の高い木が生い茂り、遠目には廃屋となつている建物が見える。そこをリアス達一行は歩いていった。

「イツセー、良い機会だから悪魔としての戦いを経験しなさい」

「ええー！お、俺なんか戦力にならないですよー！」

「まあ、それはそうだろう」

「ええ、そうね。ってアレイ?! 貴方なんでここにいるのよー！」

リアスが驚き声を上げる。何時の間にかアレイスターが一行の中にしれつと混じっていたのだ。

「何だ? 余もオカルト研究部に籍を置くのだ。ここにいっても何らおかしな事はないだろう。それともあれか? 余だけ仲間外れにしようというのか? ああ、何という悲劇! 余は悲しいぞ」

「ああもう! 分かったわよ! もう何も言わないから変な事だけはしないで頂戴!」

「そう怒るな、リアス・グレモリー。短気は損気というだろう?」

リアスもアレイスターにかかれれば何時もの調子を崩されてしま

う。思わず頭痛を感じずにはいられないリアスであった。

「さて、そうこうしているうちに獲物が向こうからやってきた様だ」

アレイスターがそういった瞬間、全員が身構えた。初心者 of イッセーでも分かるくらい濃い殺気や敵意が徐々に近づいて来ていたのだ。イッセーはゴクリと唾を飲む。悪魔としての始めての戦い。心強い仲間がいるものの、やはり緊張するなというのは無理がある。「不味そうな臭いがするぞ？でも美味そうな臭いもするぞ？甘いのかな？苦いのかな？」

ケタケタと笑い声を上げながら現れたのは異形の存在。上半身は裸の女性、下半身は巨大な獣。両手には一本ずつ槍を構えている。何種類もの動物を掛け合わせたキメラなのだろうか？その醜悪な姿はイッセーが今まで想像していた悪魔通りの姿であった。

「はぐれ悪魔バイサー！大公の命により貴方を消滅しに来たわ！」

「小賢しい小娘ごときが！その紅の髪のように、お前の身体を鮮血でそめあげてくれるわ！」

「雑魚ほど良く吠えるのものね！祐斗！」

「はっ！」

リアスの声に従い、今まで側に控えていた木場が物凄いスピードで飛び出した。今のイッセーではその姿を捉えるのもやっとだ。

「さて、それじゃあイッセー。今から駒の特性について説明するわ。悪魔の駒とその役割は前に説明したから覚えてるわよね？」

「は、はい」

悪魔の駒。それはかつての大戦で多くの純血悪魔を失った為に考案された道具である。これを用いて他の種族を悪魔へと転生され下僕とするのだ。

純血悪魔は出生率が低い。悪魔の駒は悪魔の数を増やす為の苦肉の策であった。そうして大戦後は悪魔の数を増やしてきたのだ。

「よろしい。悪魔の駒には実際のチェスの様に特性があるわ。祐斗の役割は『騎士』、特性はスピード。見なさい」

イッセーはリアスに促されるまま木場の方を見る。木場のスピードはどんどん上がってそろそろイッセーの目には捉えられなく

なりそうだ。

「す、すげえ……」

「ふふ、驚いたかしら？でも祐斗の真骨頂はまだまだこれからよ」

イツセーは木場のスピードに思わず感嘆の声を漏らす。バイサーは必死に腕を振るっているがその攻撃は木場に擦りもしない。

すると次の瞬間、木場が一瞬止まった。手には幅広の西洋剣が握られている。それを鞘から抜き放ち、再び木場はバイサーへと切りかかった。

「はあああああ!!! 『つもらん』へ?」

木場の振るう白刃がバイサーを捉えたと誰もが思った瞬間、バイサーが爆ぜた。文字通り身体の内側からパンツ!という音を立て破裂したのだ。当然バイサーは即死。皆、突然の出来事に理解力が追いついていないのか呆然としている。

「おっと、すまない。もう少し楽しめるものかと思っていたのだが…… 予想以上の小物だったのでな。つい手を出してしまった」

「………一体何をしたのかしら?」

リアスは顔をしかめながら問う。

相手が急に爆発する、というのはリアスにも心当たりがある。だが、内側から爆発するなど聞いた事もなかった。

バイサーの身体はいたる所に飛び散っている。見るも無残な光景だ。イツセーなどは気分を悪くして吐きそうになっている。

「単純なことだよ。相手の全身の血を魔力で操作。後はそのまま内側からボンツ!だ」

「ツ!そんな簡単に……」

まさか。リアスは思わずそう言いそうになるのを我慢する。

そもそもとして魔力のある生物の血というのはその生物自身の潤沢な魔力が含まれている。それに干渉して操作するなど一体どれだけの高等技術を必要とするのだろうか。それはリアスの兄であり、テクニクタイプのサーゼクスでさえ不可能な芸当であろう。

それを目の前の男は何の気なしにやってのけたのだ。その事実
にリアスは戦慄する。

「変な事はしないでって言ったわよね？どうしてくれるの。これからバイサーを使ってイツセーに悪魔の駒について説明しようとしたのに」

「何と。それはすまない事をした」

全く悪びれた様子の無いアレイスターにリアスは再び頭が痛くなるのを感じた。

「はあ。こうなった以上はしょうがないわ。イツセー、帰ったら座学でのお勉強よ。文句はアレイに言いなさい」

えーっ！とイツセーが嫌そうに声を上げた。かと言ってイツセーがアレイスターに文句など言えるはずもない。

こうして、イツセーの悪魔としての初めての実践はグダグダのまま終わりを告げたのであった。

◇

「はあ……出世の道は遠いなあ」

結局あの後、イツセーは部屋に戻ってから悪魔の駒についての説明を受けた。そこで、自分の駒は『兵士』だと言うことを告げられたのだ。

兵士はチェスの中では一番の下っ端。将棋でいう歩だ。出世の道はそう甘くは無いいことなのだろう。

「いつまでもウジウジしても仕方ないか。一歩ずつ進むしか無いもんな。よし！まずは契約取りだ。今日こそは契約を結んで見せるぞ！」

イツセーは自分に気合を入れ直し、依頼人の家のインターホンを押そうとした。そこで、ふとある事に気づく。玄関扉が開いているのだ。こんな深夜に扉が開いているというのは不自然極まりない。嫌な予感を感じたイツセーは恐る恐る空いた扉から家へと侵入した。

「うっー」

リビングへと入ったイツセーの目に飛び込んできたのは貼り付けとなった男性の死体。この人物が依頼人だったのだろうか？血は

滴り落ちて血溜まりとなっていて、太い釘により壁に貼り付けられている。この前、バイサーの惨状を見ていなかったら恐らくイツセーは吐いていただろう。

「なんだ…… なんだよこれ！」

『悪魔に与する者には等しく死を』ってね」

突然聞こえていた声の方を振り返ってみれば、そこにはゴスロリを着た一人の……

「墮天使!? どうしてもここに!」

「どうしてもこうしてもないっつーの! 偶々通りかかったら悪魔を呼ぼうとしてる人間を見つけたから殺しただけだし。まあでもラツキーだったかな? こんな所でレイナーレ様が殺し損ねた雑魚を見つけたんだからさあ!」

「ッ!」

目の前のゴスロリ墮天使が光の槍を作り出す。やはり何度見てもなれる事は無いのか、またイツセーは悪寒を感じた。

「お、お前がこの人を殺したのか!」

「はあ? あんた馬鹿? さつきからそう言ってるじゃん。あ、もしかしてそんな事も理解出来ない程の低脳ゴミ屑野郎なんですか? ギヤハハ! まあでも関係ないよね。あんたはここで死ぬんだからさあ!」

そういうや否や墮天使は槍を振りかぶりイツセーへと突撃してきた。

最近はこの様な事ばかりだと内心悪態をつきながらも必死にどう対処しようか考えていた時、

「やめてください!」

「んっん、こいつは面白い事になってるじゃないの」

「あ、アーシア! ……と誰だ?」

イツセーが聞き覚えのある声をする方へと視線を移してみればそこには見覚えのある金髪シスター、アーシアと一人の白髪の神父の姿があった。

第17話

「あん？アーシアとフリードじゃん。なにやってんの？外で見張つとけって言ったつしよ」

墮天使が眉を釣り上げながらそう言った。

「そんな…… ミッテルトさん、どうして…… !?いいやあああああ！」

「あーあー、こんなにしちやつて。こいつは純真なアーシアちゃんにはインパクトが強すぎるつしよ」

室内を見回したアーシアの目に貼り付けにされた遺体が飛び込んできた。当然、そういつたことにあまり耐性のないアーシアは大きな悲鳴を上げる。するとすかさずフリードが一体何処から取り出したのだろうか、大きなブルーシートを広げ遺体に覆いかぶせた。

「あ？何やってんだよフリード」

「うるせえぞ、誰に向かって命令してんだ？俺に命令していいのは二人だけなんだよ。殺すぞ。」

「ひっ！」「ッ！」

突如、フリードから強烈な殺気が放たれる。フリードは先ほどまで飄々としていた人物だとは思えないほど別人のように様変わりしていた。

自分に対して放たれた殺気でも無いにも関わらず、イツセーはその瞬間自分の死を感じ取った。もろに受けた墮天使、ミッテルトは溜まったものでは無いだろう。現に顔を蒼くさせ歯をカチカチと鳴らしている。

「さて、そんじゃあそろそろお仕事でもしますかねえ」

「なっ！」

ミッテルトからフツと視線を外したフリードは何処からともなく光の剣を取り出しイツセーと相對する。何時の間にか雰囲気は元に戻っていた。

「隙あり！ちえりゃあ！」

「があっ！」

変な掛け声と共にフリードが一誠へと斬りかかる。その斬撃は剣術という点で見ればあまりに適当でお粗末な一撃であった。しかし、アーシアに注意を向けていたイツセーはワンテンポ反応に遅れてしまう。

せめて致命傷だけは避けねばならないと思い必死にイツセーは身体を捻る。その結果、咄嗟の判断が功を奏したのか、フリードの剣はイツセーの腹部を薄く切るだけに留まった。

「ハアハア、た、助かつ……グアアアア！」

薄く切られただけ、そう思っていたイツセーを強烈な痛みが襲う。何事かと傷口を見てみればジュウジュウと音を立てて身体をとかしていた。

「あれあれ……もしかして助かったと思っちゃった感じ？残念でした」
この光の剣はエクソシストの標準装備、そして悪魔くんには効果抜群の必殺武器なのさ」

「そんな……イツセーさんが悪魔？」

ビュンビュンと光の剣を振り回しながらフリードは愉快そうにそう述べた。アーシアはフリードのその言葉に目を大きくして驚く。信じたくはないが現に光の剣のダメージを受けているその姿はイツセーが悪魔であるということアーシアに伝えていた。

「ほんじゃあとどめと行こうかねえ」

「待つてくださいー！」

激痛に身をよじらせているイツセーにとどめをさそうとフリードが歩み寄る。しかしアーシアが手を大きく広げ、その行く手を阻んだ。

「ん、どうしちゃったのかな？アーシアちゃん。もしかして悪魔くんを庇っちゃう系なの？」

「イツセーさんは良いお方ですーどうか見逃してあげてくださいー！」

「うーん、アーシアちゃんの言う事はなるべく聞いてあげたいんだけど……こいつばっかしはそうもいかないんだよね」

「悪魔にだって良い人はいます!」

「悪魔にだって良い人はいる……か。なるほど、その通り。そいつは真理だ。この世には良い悪魔だっているし、糞みたいな神父だっている。だけどな、アーシアちゃん。仮にこの悪魔くんが良い人だったとしても、はいそうですかと簡単に見逃す訳にはいかないんだよ」

「っ! そんな!」

「ふく、一つ話をしようか。昔あるところに一人の悪魔がおりました。その悪魔はまだ力も弱い下級悪魔でした。そこにある日、一人の神父が訪れます。その悪魔を見つけた神父は当然悪魔を滅しようとした。完璧に滅せられようとした時、その悪魔が必死に神父に命乞いをしたのです。神父はここで一つのミスを犯してしまいます。悪魔に情けを掛けて見逃してしまったのです。さて、この悪魔はその後どうなったのでしょうか」

「……神父さまに感謝して改心したのではないのですか?」

「ぶつぶー! 外れー。正解は人々の害となる残虐非道の悪魔になったでしたー! ちなみに、この悪魔が結局討伐されたがエクソシストにもかなり大きな被害が出たらしいよ。今の話は昔からエクソシスト達に伝わる有名な話さ。もう分かっただろう? 今は善良でもこの後どうなるか分からない。だから悪魔は見つけ次第殺す。それが俺たちエクソシストの仕事なのさ」

「それでも! それでも私は!」

「分かってるさ、アーシアちゃんならそう言うってな。だから今は……」

「うっ!」

「少しばかり眠っててくれ」

フリードは手刀を一発、ストーンとアーシアの首にあて崩れ落ちたアーシアを優しく抱きかかえた。

「さて、それじゃあ今度こそ……」

「やらせないよ」

フリードが再びイッセーの方へ振り向いた瞬間、部屋の中心に魔法陣が出現し複数の人影が躍り出た。

「お〜つと！ここに来て悪魔の団体様御一行の到着か〜！」

「悪いね、彼は僕らの仲間でき。こんな所でやらせる訳にはいかないよ」

「あん？悪魔の癖にそういう事気にしちゃう系なの？あ！もしかしてあれか？モーホーか！悪魔のモーホーとかマジないわー」

「下品な口だ。はぐれエクソシストをやってるのも納得だよ」

「あらあら、困った神父さんですわ……プツ」

木場はフリードの口の悪さに顔を歪ませる。他の眷属の面々も同様だ。ただ一人朱乃だけは意外とノリノリで普段あれだけ嫌っている神父のふりをしているフリードを見て吹き出しそうになっていた。

「イツセー、ゴメンなさいね。まさかこんな事になるとは思わなくて……でも安心しなさい。もう大丈夫よ」

「は、はい。うっ、痛たた……」

「っ！イツセー！貴方怪我してるじゃない！」

「あ、すいません……そ、その……切られちゃって……」

イツセーは苦笑いで誤魔化そうとしたがリアスは憤怒の表情をフリードに向けた。リアスからは怒りのあまり紅い魔力が漏れている。

「ずいぶんと私の可愛い下僕をかわいがってくれたみたいね？」

「おいおい、そんなのはただの挨拶じゃないの。本番はこれからっしょ。なんたって獲物がこれだけ増えたからね。俺っちがまとめてフルボッコにしてやんよ！」

シュツシュツと声を出しながらその場でフリードはシャドーボクシングの様な動きをする。相手を完全にバカにした態度にリアスの我慢もそろそろ限界の様だ。

「もういいわ！ここで貴方を滅ぼしてあげる！」

「っ！待ってください部長！ここに複数の墮天使が向かって来ています。負けるつもりはありませんがこの場で戦うのは賢明ではありません」

リアスが自慢の滅びの魔力を発射しようとした瞬間、朱乃が慌て

てそれを止める。

「……………イツセーを回収しだい帰還するわ。準備を」

「はい」

リアスはフリードを一睨みした後悔しそうにしながら帰還命令を出す。一方のフリードはヘラヘラと笑いながらもこちらへと攻撃を仕掛けてくる素振りはなかった。

「待ってください部長！あの子も一緒に！」

「無理よ。この魔法陣は私の眷属しかジャンプ出来ないわ」

「そんな……………」

「あら？もう帰っちゃうの？バイビー！」

イツセーとしてもこのままアジアをおいて行くのは心残りではあったが、先ほどのフリードの様子からそこまで酷い事はされないだろうと思い後ろ髪を引かれる思いで部屋へと帰還したのだった。

◇

「レイナー様、もうすぐでミッテルト達の所へと到着します」

「全く、あの子達にも困ったものね。ただでさえドーナシークがアンノウンに殺されているというのに。特にアジアはこれの完成には不可欠な存在。逃がすわけにはいかないわ。そう、私が至高の墮天使になるためにはね……………」

レイナーはそう言って愛おしそうに手に持つ本を撫でる。その禍々しい本の表紙にはこう書かれていた。

『金枝篇 血液言語版』

第18話

「言いたい事は色々あるかもしれないけれどまずはイツセーの治療から始めるわよ」

部室へと帰還してきたリアス一行。最近は怪我してばかりだと思いつながらイツセーは治療を受けるのだった。

「部長、助けにきてくれてありがとうございます」

「私の大切な眷属だもの。当然の事だわ。それに謝らなければいけないのはこちらの方よ。ごめんなさいイツセー。まさか依頼人の元に墮天使達がいるとは思わなかったの」

「ツ！そうだ！あの神父！部長、なんで墮天使と神父が一緒に行動してたんですか！」

「あれは恐らくはぐれ悪魔払いよ」

「はぐれ悪魔払い？」

「はぐれ悪魔と似たようなものさ。教会で異端とされた悪魔払い。それがはぐれ悪魔払いだよ」

イツセーの疑問に木場が横から答える。どの組織にもそういう者はいるのだ。人間社会でもそれは変わらない。

「さて、それじゃあこれからの予定を伝えるわ」

そしてリアスの口から伝えられたのは、領土内に侵入した墮天使の討伐であった。

「領土への侵入のみならず、数名の民間人の殺害。流石にこれ以上黙っているというのは無理な話だわ。『神の子を見張るもの』にも文句は言えないはずよ。既に敵の本拠地は掴んでる。イツセーの怪我が治り次第殴り込みに行くわよ！」

「な、殴り込みですか！」

「安心しなさいイツセー。今度は一人ではないわ。それに敵の主戦力は墮天使数名にあのはぐれ悪魔払い一人。十分私たちでも勝算のある相手よ」

「はい……」

リアスの鼓舞する言葉にもイツセーはいまいち自信を持つ事が

できない。イツセーの不安の種はフリードであった。先ほど感じたフリードの殺気。あれはリアス達が束になつても敵わない、別次元の存在の様に思えたのだ。そして僅かにだが自分の知る超常の存在、アレイ・クロウに似た雰囲気も感じ取っていた。

「あの……アレイ先輩は一緒に来ないんでしょうか？」

「それは出来ないわ。イツセー、貴方は私の眷属よ。けど、アレイは違う。これは私の領土内での不祥事なの。だから私たち自身で解決しなくては意味がないのよ。バイサーの時は勝手に着いてきてしまつたけれど私はもうアレイを関わらせるつもりはないわ。勿論、アレイは大切なオカルト研究部の仲間だとは思っているわよ。関わらせないのは私達で対処しなくてはならない時だけ。わかってちょうだい」
頼みの綱のアレイが参加しないと聞きイツセーの不安はさらに増してしまふ。その様子を見たリアスは更に言葉を続ける。

「イツセー、貴方はあのシスターを助けたいんでしょうか？」
「っ!？」

今の言葉にイツセーが反応した。我ながらずるい言い方である
とリアスは自嘲する。

「さつきは助けられなかったあのシスター。今度は助けられるかもしれない。できるかどうか、それは貴方次第よ」

リアスの言葉に段々とイツセーの目にやる気が灯っていく。

「俺が……俺がやれば……」

「そうよ、イツセー。貴方はどうするの？」

「やります！俺が！俺がアシアを助けるんだ！」

「その意気よ！さあ、話している間に怪我は完治したわ！早速だけど今から殴り込みに行くわよ！」

イツセーがついに覚悟を決める。あの心優しきシスターを、自らの手で救うのだと。

時間は未だ深夜、人一人歩いていない町をリアス達一行は墮天使の本拠地である教会へと向かうのであった。

「あらあら、あちらも準備万端のようですわ」

既に教会が目視できる距離まで近づいてきたリアス達。朱乃の言葉通り、武装した神父集団と二人の堕天使が教会の前に陣取っていた。

「ここは集団戦に向いている私と朱乃に任せなさい。イツセー、祐斗、小猫の三人は裏手から教会内に侵入するのよ」

「はいー」

「あそこに堕天使が二人いるということは教会内にはあの神父とリーダーの堕天使のみのはずよ。祐斗、小猫。イツセーを守ってあげてちょうだい。イツセー、兵士の特性は覚えているわね？プロモーシヨンの許可を出すわ。全力でやりなさい」

「今から私が大きめの攻撃をします。その隙に走って下さい。それじゃあ行きますわー！」

朱乃が手に集中させていた魔力を解き放つ。極大の雷が敵の集団を襲った。今のおよそ3分の一は倒しただろう。その隙にイツセー達三人が走り出す。

「さて、朱乃。敵は人数が多いだけの烏合の衆。さっさと片付けてみんなの後を追うわよ」

「もちろんですわ」

全身に魔力をたぎらせ、二人は敵中に飛び込むのだった。

◇

一方、教会へと侵入する事に成功したイツセー達はフリードと相対していた。

「おっと！さつき会ったばつかなのにもう来たのか！それ程までに俺つちに切られたかったのかい？」

「バカな事いうんじゃないやねえ！俺たちはお前たちを倒すために来たんだ！」

「俺つちを倒す？ブハハ！そいつは冗談きついわ。チミ達が俺つち

を倒すなんてそれなんて無理ゲー?」

「あいにくだが君に構ってる時間はあまりないんだ。さっさと決めさせてもらおうよ」

木場が持ち前のスピードを活かしフリードへと突撃する。

「んっんー、スピードは中々のもんだ」

「なっ!」

木場が驚嘆の声を上げた。フリードは木場のスピードに対応し剣を容易く受け止めたのだ。

「君はどれだけ人をバカにすれば気が済むんだ」

「うん?なんのこっちゃ?」

木場が憎々しげに見つめるフリードの手には一本の焼き鳥の串が握られていた。

「ハアアアア?!な、なんだよそれ!」

「ハアアアア?!悪魔君達は知らないんですか?こいつは『妖刀焼き鳥ブレード つくね』なんですけど?」

「妖刀焼き鳥ブレード つくね!?!」

何をバカな事を!と内心イツセーは叫ぶが現に木場の剣を受け止めたのだ。まさか本当に妖刀なのではないかと思いかけ……

「落ち着いて下さい二人とも。あれは本当にただの焼き鳥の串です。恐らく気で強化しているでしょう。ちなみにあの串は駅前焼き鳥屋の串です」

小猫によって現実に戻された。

「ハッ!お、驚かせやがって……」

「君がそれで戦うというのなら僕はそれで構わないよ。ただ、いつまでその余裕が続くのかな?」

気を取り直して木場が再度突貫する。

「ふっ!ほっ!せいっ!ちえりゃあ!」

「グウッ!」

自身の全力を持ってフリードへと切りかかる。しかし、その刃がフリードを捉える事はなかった。炎の、氷の、雷の、光の、闇の、様々な魔剣を使い、時には二刀で切りかかろうとも全て焼き鳥の串に防が

れる。

その様子を見てイツセーは嫌な予感が当たったと考えていた。やはりフリードの実力は別格なのだ。しかし、フリードを突破しない限りアーシアを助ける事が出来ないのもまた事実。

「小猫ちゃん！」

自信を戦車へとプロモーションさせて小猫とタイミングを合わせフリードへと殴りかかる。戦車二人分の打撃だ。これでダメージを受けないやつはそう居ない。だがそのイツセーの甘い考えは簡単に覆された。

「パワーもまあ年齢を考えれば大したもんだ」

「おいおい、嘘だろ……本当に人間かよ」

「信じられません……」

そこにはイツセーと小猫の二人の拳を受けてなおその場から一歩も動く事なく平然としているフリードの姿があった。

「お前達の個々の能力は良い線いつてるよ。同年代でも上から数えた方が早いくらいはあるんじゃないの？」

予期せぬ敵からの賞賛にイツセー達の動きが止まる。

「だけど俺たちには届かない。そんなんじやアーシアちゃんを助けるなんぞ夢のまた夢だな」

「クソっ！」

「一つ、良い事を教えてやるよ。アーシアちゃんだけだな、このままだと無事じゃすまないだろうなあ」

「どういう事だ！」

「この奥でなこのリーダーがアーシアちゃんを使って何かやろうとしてるんだよ。何をやろうとしているかは俺たちには分からんけど無事じゃすまないだろうな」

「そんな……このままじゃアーシアが！なんで！なんで俺にはアーシアを助ける力がないんだ！」

「……おいおい、悪魔君。まだ使っていない力があるんじやねーの？」

「……使っていない力？使っていない…… うん？そうか！神器か！」

イツセーはすっかり忘れていたが自分には神器が宿っていることを思い出した。前にリアスが言っていた言葉、神器は思いに答える。ならばそれは今ではないのか。そしてイツセーは力の限り叫ぶ。「お前が全ての始まりなんだ！お前のせいで俺は色々酷い目にあつたんだぞ！だったら少しぐらい……少しぐらい俺に力をかしてやがれえええ！」

『Dragon booster!!』

光と共にイツセーの腕に紅い籠手が現れる。

「おおでた！よし！行くぜえええ！」

「ようやくか…… んじゃあかかって来なさいな！」

イツセーの身体は自分が思っていたよりも速く動きフリードへと迫る。これが神器の能力なのだろうか、一瞬その考えが頭よぎるがいや今は目の前の敵を倒すのが先決だと考えて思考を切り替えフリードへと殴りかかった。

「ん〜！良い具合になって来てるな！」

「すぐにその口を黙らせてやるよ！」

『boost』

籠手から再び音声が流れる。その瞬間、イツセーは自分の中の力が増すのを感じた。

「おお！良いよ！良いよ！良い感じだよ！」

「うおおおおお！」

『boost』

雄叫びをあげながらイツセーは何度も何度もフリードへと殴りかかるがその度に焼き鳥の串で防がれ、避けられ、転がされる。だがイツセーがその手を休める事はなかった。

「ハアハア」

「おっと！そろそろ悪魔君はお疲れかな？」

「……して」

「あん？」

「どうして！どうしてそれだけの力がありながらお前がアジアを助けてやらないんだよ！お前、アジアには優しかったじゃねーか！」

疲労が溜まり限界へと近づきつつある中、イツセーはずっと疑問だった事をフリードに問いただした。その言葉にフリードの動きも止まる。

「……まあ悪魔君のいう事も最もだな。確かに俺っちならアーシアちゃんを助けるのは簡単だ。だけどその役目は俺っちじゃないのさ」
「役目ってなんだよ！」

「役目っていうのは少し違うか……俺っちじゃアーシアちゃんを本当に光の当たる場所に連れて行く事が出来ないのさ」

「何言ってるのかわかんねーよ！」

「おう、もう限界か」

イツセーの打撃に遂に耐えられなくなったのかフリードの持つ妖刀焼き鳥ブレード つくねが真ん中から折れた。まあ焼き鳥の串にしてはよく持ったほうだろう。

「アーシアはお前を信用していた！光の当たる場所だかなんだかはしらねけどお前のそれは全部ただの言い訳だろうがあああああ！」

『Explosion!!』

「何っ！うおおお！」

イツセーの怒号と共に再び籠手から音声が流れる。その瞬間、イツセーの身体は爆発的に加速し、その拳は遂にフリードへと頬へと突き刺さった。フリードはそのまま吹き飛ばされ壁へと衝突する。

「ハアハア……ど、どうだ！やったぞ！」

「おー、痛つつ。良いの一発もらっちゃ……プベツ！」

フリードが再び動き出そうとした瞬間、何処からか座椅子が落下してフリードに命中した。その後立て続けにいくつもの座椅子が落下して完全にフリードは下敷きになってしまった。

「こ、小猫ちゃん……」

「何か文句でも？祐斗先輩」

「い、いや何も……」

座椅子を投げた犯人、それは他でもない小猫だった。騎士として一言文句を言いたい木場ではあったが、何か落ち度でも？と言いたげな小猫の前に黙るしかないのであった。

「さて、行きましよう二人とも」

「お、おう」「う、うん」

学園のマスコットである小猫の正体は恐ろしかった……そう思いながらイツセーは先に進むのだった。

◇

イツセー達が去ってから少し後、教会内に二人分の足音が響き渡る。

「いつまでそうしてるのフリード。それともお仕置きがお望みかしら？」

「はい起きた！俺っち今起きたよ！だからその手の魔力は引つ込めてえええ！」

フリードの上に覆いかぶさっていたいくつもの座椅子が一瞬で細切れになり、下からフリードが現れる。

「全く、最初からそうすれば良いのよ」

「姐さんは容赦なさすぎて俺っちガクブルだわー」

フリードにとつてエセルドレーダとは母親の様な存在であり、どうにも頭が上がらないのであった。

「今代の赤龍帝はどうであつた？」

「はい、ボス。実力はまだまだ橋にも棒にもかかりません。しかし……爆発力は大したものです。俺っちも最後に良いの一発くらつちやいました。将来が楽しみですね」

「ほう？お前がか？」

頬を抑えながら苦笑するフリード。アレイスターは興味深そうに聞き返した。

「ええ、ああいうのがボスの言うヒーローつてやつなんでしょうね。耳の痛い小言も貰っちゃいましたよ」

「そう思うなら最初からあの娘を助けてやれば良かったものを」

「後悔先に立たずって奴です。けどもうアーシアちゃんには俺っちは必要ないですよ。今度こそ本当の友達が沢山出来るんだから……」

「さて、お前がそう思っても相手がそう思ってるとは限らんがな……」
「何か言いましたかボス？」

「いや、何も…… ふむ、どうやらあちらも終わったようだ」
『吹っ飛べ！クソ天使ッ！』

アレイスターが言葉を言い終えるその時、イツセーの大声と強烈な打撃音が教会内に響き渡った。

「これでようやくプロローグが終わりを告げるか」

イツセー達が墮天使を倒したのだろう。もはやここに用事のな
いアレイスター達も帰路に着こうとした瞬間、教会内を巨大な魔力が
支配した。

「これは……」

「マスター！」

この感覚、アレイスターとエセルドレーダにとっては忘れる事な
ど出来ない、前世で幾度となく感じてきたものであった。

「この感覚。中々に力のある魔導書だな」

次の瞬間には重苦しい気配は霧散した。力を感じたのは一瞬。
恐らく魔導書の持ち主は既に逃げ去ったのだろう。

「失態だな、フリード」

「も、申し訳ありませんボス！今すぐ持ち主をぶつ殺して……」

「いや、今回はこれほどの魔導書が近くにありながら気づかなかつた
余の落ち度でもある。それよりもフリード、お前は今から魔導書の持
ち主を監視しろ。殺す必要はない」

「了解です」

フリードは一陣の風となりその場から消え失せた。

「まさかこの世界に機械神を召喚する事の出来るほどの力を持つ魔導
書が存在していたとは……」

「イエス、マスター。たとえどんな相手であろうとマスターと私、そし
てリベル・レギスの前には敵は居ません」

「勿論だともエセルドレーダ。ああ一体どのような担い手なのだろう
か。今から楽しみであるな」

アレイスターは大きな笑い声をあげながらその場を立ち去る

のだった。

◇

ここは神の子を見張るものの本拠地のとある一室。八枚翼の墮天使とボロボロになった一人の中級墮天使が顔を合わせて居た。

「コカビエル様！遂に、遂にこれが完成いたしました！」

ボロボロの墮天使、レイナーレが興奮しながら八枚翼の墮天使、コカビエルへと一冊の本を差し出した。

レイナーレの持つ魔導書『金枝篇 血液言語版』それは666人の血、そして一人の信心深い聖女の血を吸う事で完成となる魔導書であった。レイナーレはリアス達に止めをさされる直前、最後の力を引き絞りアシアの血液を奪取、そしてあらかじめ仕込んで置いた術式で神の子を見張るものに帰還し無事コカビエルから言い渡された任務をこなしたのだった。

「よくやった。だが貴様の役割はこれで終わりだ」

レイナーレから魔導書を受け取ったコカビエルは光の槍をレイナーレに突き刺した。

「な……何故……コカビエル様……」

「何故俺がわざわざ手間を掛けて貴様に魔導書の完成を任せたか分かるか？貴様は聖女の血を吸わせて完成だと思っていたようだがそれは違う。最後に必要な工程、それは持ち主の魂を捧げる事だ」

「そ……そんな……私は……至高の……墮天使……に……」

「安心しろ。至高の墮天使には俺がなる」

コカビエルは虫の息であったレイナーレの頭をぐしゃりと踏み潰し高笑いを上げた。

「フハハハハハ！ようやくやくだ！ようやく奴を打倒できる力を手に入れた！待っているアレイスター！」

貴様はこの俺、コカビエルが殺す！」

第19話

アーシアが悪魔となった教会襲撃から数日が経ち、イツセー達は平和な日々を過ごしていた。勿論悪魔となったのだから今までの通りの生活というわけにはいかない。イツセーはリアス監督の下、毎日トレーニングに励んでいる。同様にアーシアもイツセーと共に深夜のチラシ配りの仕事をやっていた。しかしそんな平和は長くは続かない。新たな騒乱が着々と近づいているのだった。

「はあ〜」

現在、イツセー、アーシア、木場の三人は旧校舎にある部室へと向かっている。イツセーはため息をつきながら廊下を歩き、その足取りはどことなく重い。アーシアがそれを心配そうに見つめているがその視線にイツセーは気づかなかった。

「部長は一体どうしたんだろう……」

リアスはこのところどこか心ここにあらずといったようにブーツとしている事が多かった。誰が話しかけても反応が鈍く、何かしら厄介事を抱えているのはイツセーから見ても丸わかりであった。

そして遂に昨夜、イツセーの部屋にリアスが押しかけ裸で抱いてくれと迫ってきたのだ。流石のイツセーもこれには驚いた。勿論、眼福ではあったのだがいきなり抱いてくれと言われはいそうですかと領けるほどの度量は童貞のイツセーには無い。そのままリアスに押し倒され理性が飛びそうになったその時、一人の乱入者に止められその場は収まったのだった。

昨夜の怒涛の出来事の中では混乱の極地にいたイツセーだが、一夜明ければ流石に冷静になってくる。リアスがあそこまで強行手段に出たのだ。事態はイツセーが思っていたよりも深刻なのかもしれない。以上が現在イツセーを悩ましている出来事の一連の流れだった。

「部長のお悩みか。たぶん、グレモリー家に関わる事じゃないかな？」

イツセーは移動中に木場へと尋ねる。帰ってきた答えは以上の

通り。木場は詳しくは知らないようだ。眷属になってまだ数日であるイツセーは悪魔の事情などまだまだ知る由も無い。ましてやグレモリー家などと言われても分かるはずもなかった。

「朱乃さんなら知ってるよな？」

「そうだね。朱乃さんは部長の懐刀だから」

あまりリアスの事情を詮索するのは良く無いとはわかっていながらもイツセーはどうしてもその事が気になるのであった。

そんな事をしているうちにオカルト研究部の扉が見えてくる。

「僕がここまで来て初めて気配に気づくなんて……」

木場は目を細め、顔を強張らせる。恐らく何か感じ取ったのだろうがイツセーはそんな事はお構いなしと扉を開ける。

「全員揃ったわね。では、部活をする前に少し話があるの」

部屋の中にいたのはリアス、朱乃、小猫、そして昨夜イツセーを止めた銀髪のメイド、グレイフィアの四人であった。いつもの和気あいあいとした雰囲気はなりをひそめ、張り詰めた空気が部室内を支配している。

「実はね……」

リアスが口を開いた瞬間、部屋の中心の魔法陣が光出した。もともと書かれていたグレモリーの紋様がイツセーの知らない形へと変化してゆく。

「——フェニックス」

木場の呟いた言葉と共に眩い光が部屋を覆った。次の瞬間、魔法陣から炎が巻き起こり人影が現れる。そのシルエットが腕を一振りすると周囲の炎が掻き消えた。

「ふう、人間界は久しぶりだ」

現れたのは赤いスーツを身に纏う一人の男。

「愛しのリアス。会いに来たぜ」

男は片手で髪を掻きあげ甘ったるい声でそう言い放った。

◇

「いやー、リアスの女王が淹れてくれたお茶は美味しい物だな」

「痛み入りますわ」

魔方陣から現れた男ライザー・フェニックス、純潔の上級悪魔であり古い家柄を持つフェニックス家の三男、グレイフィアからそう説明されたイツセーは驚きを隠せなかった。さらにその後、リアスの婚約者だと伝えられた時のイツセーの表情は筆舌に尽くし難いものであった。

そのライザーは現在ソファに座りリアスの髪や肩などを触り続けている。単なる下僕でしかないイツセー達は少し離れた席からそんな二人の様子を見ている事しか出来ず齒痒い思いをしていた。

「いい加減にしてちょうだい！」

そんな中、遂に堪忍袋の緒が切れたリアスの怒号が室内に響き渡った。リアスは立ち上がりライザーを鋭く睨んでいる。

「ライザー！前にも言ったはずよ！私はあなたと結婚なんてしないわ！」

「はあ、リアス。そんなまがまがが通用すると思っているのか？分からないのか？この縁談には悪魔の未来がかかっているんだ。君だつてグレモリー家を潰すわけにはいかないんだろ？」

「私は家を潰さないわ！婿養子だつて迎え入れるつもりよ。でもライザー、それはあなたじゃやない！私は私が良いとおもった者と結婚する。それぐらいの権利はあるはずだわ！」

リアスのはっきりとした拒絶の言葉にニヤニヤとした笑みを浮かべていたライザーの機嫌が徐々に悪くなっていく。

「これでも俺はフェニックス家の看板を背負った悪魔なんだよ。フェニックス家に泥を塗るわけにはいかないんだ。だいたい俺はこんなところには来たくなかったんだ。人間界の炎を風は来たない。フェニックスの悪魔としては堪え難いんだよ！」

ライザーの言葉と共に周囲を炎が駆け巡る。

「俺は君の下僕を全部燃やし尽くしてでも君を冥界に連れ帰るぞ！」

ライザーから放たれたプレッシャーが部屋を支配するとともに炎が勢いを増した。ライザーは墮天使よりも圧倒的に強いのだろう。イツセーはその殺意、敵意に晒され全身が震え出す。

ライザーの炎が背中へと集まり翼のような形を作り出す。確かにその姿はフェニックスにふさわしかった。限界まで張り詰めた部屋の空気。いよいよライザーが動きだそうとした瞬間、いつもの冷静で恐ろしい、しかしイツセーにとっては何よりも心強い男の声が響き渡った。

「やれやれ、この場は話し合いの場ではなかったのか？どこぞのネゴシエーターではあるまいし。それ以上は些か無粋ではないか？」

いつも通り、気づけはアレイスターがソファへと腰掛けています。一触即発の部屋の雰囲気などお構いなしにくつろぐその姿はイツセーに落ち着きと安堵を与えてくれるものだった。

「ちよつとアレイ。今は大事な話し合い中なん『リアス!!!』下がりなさい!!!」『キャッ!』

グレモリー眷属でないアレイスターを巻き込む訳にはいかなないとリアスがアレイスターへと退出を促そうとした瞬間、リアスは強い力に引つ張られ投げ飛ばされた。一体全体何事かと思ってみればグレイファイアが顔を真っ青にさせ震えながらもここは通さないと口をばかりにアレイスターの前に立ちふさがっていた。

「ちよ、ちよつといきなりどうしたのよグレイファイア」

「何をしてるのリアス！早く逃げなさい！ライザー様も！一刻も早くこの場から離れるのよ！」

グレイファイアはメイド時の敬語ではなく切羽詰まったようにそう叫んだ。今までそのようなグレイファイアを見たことがなかったリアスは慌ててグレイファイアを止めようとする。

「急にどうしたのよグレイファイア！あれはオカルト研究部の部員のアレイ・クロウよ！落ち着いて！」

「アレイ・クロウですって！何をバカな！あれは……あれはアレイス『始めまして。アレイ・クロウだ。今はそう名乗っている。間違えるなよ?』 ツ!!!」

アレイスターから言葉を掛けられる。ただそれだけでグレイファイアは立ち向かおうとしていた心がくじけそうになった。何に変えても自分の義妹を守らなくてはならない、意識が飛びそうになりな

がらもグレイファイアはアレイスターから発せられる重圧に耐えた。

グレイファイアは大戦を生き残った悪魔だ。当然アレイスターのことは知っているし戦場で見かけたこともある。そう知っているのだ。アレイスターのその理不尽なまでの力を。それゆえグレイファイアはアレイスターを恐れる。グレイファイアにとってアレイスターとは恐怖の象徴であった。どれだけ夫からアレイスターはそんな奴じゃないと言われてもそれだけは今まで変わることはなかった。

「奴もいい女を妻にしたものだ。余を知りつつも立ち向かおうとするのだからな」

「あなたは……あなたは何故このようなところに？」

「そうだな……面白いものを見つけた、とでも言っておこうか」

当然その答えはグレイファイアが納得できるものではなかったがこれ以上アレイスターに問いただしても何も答えないだろうし、そもそもグレイファイアにはアレイスターに対して問いただすという行為がでしなかつた。

「さて、グレモリー家とフェニックス家との縁談であったな。話し合いが難航しているようだだが余にいい考えがあるぞ。たしか成人した悪魔同士が戦うゲームがあつただろう？その勝者の言い分を聞くというのはどうだ？」

「レーディングゲームのことでしょうか？」

「そう、それだ。異論はあるか？」

「いえ。この世にあなたに意見できる者がどれだけ居ましようか？少なくとも私には無理です」

「ちよ、ちよつと待ちなさい！なに勝手に話を進めてるの！というかグレイファイアはアレイと知り合いなの?!」

グレイファイアが動き出してから呆気に取られて居たりアス達、そしてライザー。いち早く正気に戻ったリアスが抗議の声を上げた。

「お嬢様、もともと話し合いがこじれた時はレーディングゲームで決着をつけよと両家から仰せつかっております。これはもともと予想されていたことです。そして私とアレイ様が知り合いかという問いについては答えることは出来ません」

ある程度落ち着きを取り戻したのか元の口調に戻ったグレイフィアがそう答える。

「な、なんだかよく分からんがゲームで決着をつけるというならば都合だ。だけどリアス。本当に良いのか？」

「どう言うことかしら？」

「なに、俺はすでに成人しているし何度もゲームをやっている。それになありアス、まさかここにいる面子が君の下僕なのか？」

「アレイは違うけどかねがあつてるわ。だとしたらどうなの？」

「これじゃあ話にならないんじゃないか？君の女王である雷の巫女ぐらしいか俺の可愛い下僕に対抗出来そうにないな」

そう良いながらライザーがパチンと指を鳴らすとフェニックスの魔法陣が光出し総勢15名の眷属悪魔が現れた。

「とまあこんなもんだ。これを見てもまだ君は勝ち目があると思うのか？」

「くっ！」

ライザーが自慢げにそう言い放つ。数というのはなんにおいても大きなアドバンテージとなる。質より量という言葉があるくらいだ。レーディングゲームにおいてもそれは変わらない。だが、量に勝る質があるのなら話は変わる。質より量、しかしまだ若いリアスの手札には量に勝る質は存在していなかった。

「だが俺も鬼じゃない。その人間、あれを助っ人として参加させてもいいぞ。かまいませんよね？グレイフィアさま」

「それは……」

グレイフィアが言い淀む。アレイスターこそ量より質の典型だろう。アレイスターが出れば完全に出来レースになる。いや、そんな些細な問題ではない。きつと冥界中が大騒ぎになるに違いない。そんな事はグレイフィアも分かっている。どうしようか悩んでいると当の本人であるアレイスターが拒否の声をあげた。

「何故余がおままごとにつき合わなければならんのだ？」

「おままごとだと！」

「むしろおままごとと以外のなんだというのだ？余からすれば貴公らの

戦いなど見戯に等しい」

「き、貴様！先ほどから黙っていれば調子に乗りやがって！」

「ほう？余に弓を引くか」

「黙れ！そのすかした口を二度と開けないようにしてやる！」

「いけません！ライザー様！」

グレイファイアの静止も虚しく、激昂したライザーがアレイスターめがけて炎を放つ。

「アレイ！」 「先輩！」

その様子を見たイツセー達は悲鳴をあげる。アレイスターはいつもの微笑を浮かべ、一切の回避行動を取らずに炎に包まれた。

「なんてことを……」

グレイファイアがそうつぶやく。次の瞬間、燃え盛る炎は一瞬にして消え失せ中から無傷のアレイスターが現れる。

「なっ！ば、馬鹿な！俺の炎が！」

「この程度の炎など我が宿敵の無限熱量に比べれば微々たるものだ」
「待つてください！どうか！どうか寛大な慈悲を！」

立ち上がり一步、また一步とライザーの元へ歩みを進めるアレイスターへとグレイファイアは必死に頭を下げ許しを請う。

「下がっている、メイド。躡のなっていない子供を叱るのは大人の役目だ」

「ひいっ！く、くるな！なんなんだ！なんなんだお前は！」

ライザーは尻餅をつきながらも必死に炎を飛ばすがまるで効果は無くアレイスターの歩みを止めることは出来ない。自慢の眷属達も完全にアレイスターに臆しているようで使い物にならなかつた。

「少しばかり反省する事だな。なに、フェニックスなのだ。一週間程で元に戻るだろう」

「うわあああ！なんだこれは！俺はフェニックスだぞ！嫌だ！俺は……俺は誇り高きフェニツ……」

アレイスターが手をかざした瞬間、ライザーのつま先が凍り始める。ライザーは氷を溶かそうと炎を放つが氷の侵食を止めることは出来ない。そして時間にして数秒、もがき断末魔をあげながらライ

ザーは完璧な氷像に変わってしまった。

「一体どういうことなのよこれは……」

しんと静まりかえった部屋で先ほどから置いてきぼりであったリアスがそうつぶやいた。アレイスターの登場、グレイファイアの変貌、最後はフェニックスの氷像だ。

「くくくつ……誇り高きフェニックスか。ならこの氷像は誇り高きフェニックスの像と名付けてやろうではないか」

アレイスターは愉快そうに笑う。フェニックスは炎の化身だ。それが凍るなんて一体どういうことなのだろうか？子猫は珍しそうにライザーをペシペシと叩いている。それを見たりアスはもう考えることを諦めるのだった。

「お嬢様、今日のところは解散にしましょう。ゲームの詳細は後日お伝えいたします」

「え？」

「申し訳ありませんが私は至急冥界へと帰還しなくてはならなくなりました。それでは皆様、アレイ様、失礼いたします」

「ちよっ！グレイファイア！」

リアスの制止も無視し氷像となったライザーをひっ掴むとライザーの眷属達と共にグレイファイアは冥界へと帰還してしまうのであった。

◇

「何ということをしてかしてくれたのだあのバカ息子は！」

ここは冥界のとある屋敷、魔王ルシファアの居住だ。その屋敷の廊下を一人の中年男性が慌てながら歩いていた。息を切らせながら進むこと数分、目的の部屋にたどり着き男性は身なりを整え入室した。

「魔王さま！遅くなりました！」

「おお、フェニックス卿もいらつしやったか」

「これはこれはグレモリー卿。お待たせしてしまい申し訳ない」

部屋にいたのは中年と青年の男性、そして女性が一人。魔王ルシファーとグレイフィア、そしてサーゼクス父、グレモリー卿だ。

「この度はライザーが大変な迷惑を……」

「いやいや、フェニックス卿。今回の事は誰が予想できませんでしたようか。まさか今になって彼が現れるとは……」

「いや、私がすっかりと教育しておけばあの魔人に喧嘩を売るなんてバカな真似はしなかったでしょうに。ああ！三男だからといって好きにさせていたのが間違いだった！もうフェニックス家はお終いだ！縁談ももう破談にした方が良いでしょう。そうでないとグレモリー家にも迷惑がかかる」

「いや、それはやめた方が良いでしょう」

完全に憔悴しきった顔で破談を進めるフェニックス卿にサーゼクスが待ったを掛けた。

「今回は彼、アレイスターがレーディングゲームをするように提案した、そうだろうか？グレイフィア」

「はい」

「ならばこのままゲームを行うべきでしょう。むしろ破談にした方場合アレイスターがどう出るのか予測できません。それよりもライザー君がアレイスターの満足するゲームを行えば彼は何もしなんでしょう」

「フェニックス家の命運はライザー、あのバカ息子にかかっているとこの訳か……ああ！不安だ！どうしてルヴァルじゃないんだ！」

「落ち着いて下さいフェニックス卿。流石に彼もフェニックス家を潰すということはしないでしょう……たぶん。それよりも何故今になって彼が出てきたのか……」

「……我々に対しての復讐ではないのか？サーゼクス。我々は彼に対して取り返しのつかない事をしてしまったから」

「いえ、それはないでしょう父上。彼はそんな事を気にする男ではありません。それに復讐であるのならあの時にすべて終わらせていたはずです。それよりもフェニックス卿、父上。決してアレイスターの事は口外しないでいただきたい。下手に漏らせば冥界は大混乱にな

る」

「わかつとる」

「ええ、勿論ですとも」

「ああ、アレイスター。君は何故今になって現れたんだい？現れるなら僕たちの目の前に出てきてくれれば良いのに。いやきつともうすぐ会えるんだらうね。その時が楽しみでしょうがないよ」

第20話

ライザーとの話し合いの翌日、リアス率いるグレモリー眷属はあの場所へと向かっていた。

「あのく、部長。俺たちは今どこに向かっているんですか?」

「あら? イッセーには言ってなかったかしら?」

「いやいや! 俺起きた瞬間にいきなり拉致られたんですよ!」

昨夜、悶々としてなかなか寝付けず寝不足のまま朝っぱらから叩き起こされてこうして連れ出されている一誠は疲労困憊のようだ。

「イッセー、今私達が向かっているのはアレイの家よ」

「アレイ先輩の家?!」

「そう、今日こそはアレイに自分の事を話してもらおうと思ってね。今までうやむやにしていたけれどアレイの存在は異常すぎるわ。私が戦慄するほどの魔力と操作技術、ライザーの攻撃を受けてもまるでダメージを負わなかったあの耐久力。ライザーはあんなの上級悪魔だわ。アレイは人間……かどうかは分からないけど仮に人間だとしたら無傷なんではあり得ない。それに極めつけはグレイフィアのあの様子。あんなに怯えたグレイフィアなんて初めて見たわ」

リアスの言葉にイッセー、アーシアを除く眷属達は大きく頷く。対する二人の頭には大きな?マークが浮かんだ。

「あの、部長。グレイフィアさんが怯えていたって言うてもあの人はメイドさんじゃ?」

「ああ、イッセーには言ってなかったわね。グレイフィアはグレモリー家のメイドであると同時に魔王ルシファー様の女王。そして、それは冥界最強の女王であることを意味するの」

「えく!! グレイフィアさんが冥界最強の女王!?!」

「ええ、だから私達は驚いているのよ。それに昨日の二人の様子だと二人はお互いの事を知っている。アレイの事を聞こうと思ってグレイフィアは冥界へと帰ってしまったから直接本人に聞くしかないでしょ?」

「でもだからと言ってアレイ先輩が話してくれるとは思いませんけど……」

「正直私もそう思うわ。でもだからと言ってそのままにしておくわけにはいかないでしょ？昨日散々引っ掻き回してくれたのはアレイ本人なんだから」

「ええ、そうです……ぬあっ！」

イツセーが言葉を言い切る直前にビクンと身体を震わせた。

「どうかしたイツセー？体調不良？」

「いや、なんだか最近急にこういうことがあって。別に何処か悪い訳では無いと思うんです。ただ、なんかこう体の中にある何かが怯えているような……そうな感じがするんです。それに決まってアレイ先輩の話をしている時に」

「アレイの話をしている時……ね。まあ近いうちに病院へ行っておきなさい。何かあるといけないから。さあ、もうすぐでアレイの家よ。えーつと……どうやらあれのようね」

リアスが地図と睨めっこしながらある場所を指差した。リアスの指に従い、その方向へと目を向けるイツセーを待っていたのは超が3つも4つもつくであろうかという豪邸であった。

「えっ！ちよっ！えっ！あれ!?!」

「はうく大つきいです！」

「いやはやこれは予想外と言うべきか予想通りと言うべきか……」

「あらあら」

「(……姉様の匂い?)」

「グレモリー家の本邸並みね」

閑静な住宅街に突如現れた大豪邸に空いた口が塞がらない一誠達はリアスの言葉によって現実へと引き戻される。

「いつまでも驚いてないでさっさと行くわよ。でもこの家ってインターホンはあるのかしら？」

「止まりなさい」

「ッ!!」

リアスがインターホンを探すために家へと近づこうとした瞬間、

家から一人の人物が出てきた。外見は幼い、しかし隠しきれない妖艶さを合わせ持つ可憐な少女。そしてなにより……

(なんて濃い死の気配!!)

少女とリアスの目が合う。リアスの意識があつたのはそこまでであつた。

◇

「なんて脆弱な…… マスターはこんなものどどこが気に入つたのかしら?」

「まだまだ成長途中ですもの。これから先、どうなるかわかりませんわエセルドレーダ様」

「そんなこと貴方に言われなくても分かっているわ朱乃」

他のグレモリー眷属が軒並み倒れている中、朱乃は一人涼しい顔をしている。

「それにしても私一人でみんなを運ぶのは大変ですわね」

「大変と出来ないは違うわよ」

「まあそうですが……ってあら?」

朱乃が皆を連れて部屋へと帰ろうとした時、魔法陣が出現しその中からグレイフィアが現れた。

「お嬢様?!大丈夫ですか!どうしてここに?!」

「グレイフィア様、落ち着いてください。リアスは他の皆同様眠っているだけですわ」

「眠っているだけ?……はあ、よかつた」

「よかつたじゃないわ。全く今日は招かれざる客が多すぎる。せつかくマスターと二人きりだというのに」

倒れているリアスを見た瞬間大慌てしたグレイフィアは朱乃によつて落ち着きを取り戻す。しかし、ホツと息を着いたのも束の間。エセルドレーダの苛立った様子によつて場に緊張感が現れた。

「エセルドレーダ……様でございますね?」

「あら?どうして私のこと知っているのかしら?」

「貴方の事はレヴィアタン様より聞き及んでおります」

「レヴィアタン?……ああ、あのマスターに色目を使った雌猫ね。たしか今、魔王だったかしら?どうでもいいけれど」

グレイフィアは目の前の少女に戦慄を覚えた。魔王の事をどうでもいいと吐き捨てる。エセルドレーダはその主同様化け物なのだとグレイフィアは思った。心は恐怖に支配され、身体は震えが止まらないが己の使命を果たそうと懸命に口を開く。

「アレイスター様へとお伝え下さい。我が主が貴方をお呼びしていまあつ!!?」

その瞬間、エセルドレーダの細腕がグレイフィアの首を捕らえ締めあげる。

「一体何様なのかしらね貴方達は。マスターを呼びつける? 下等生物の存在でなんたる不敬。その身をもつて償いなさい」

「あ……ああ……」

エセルドレーダが首を折ろうと力を込める。

(サーゼクス……)

グレイフィアは己の死を覚悟し目をつむった。しかしいつまでもたってもその時は訪れない。どういふことだと目を開いた瞬間、地面へとグレイフィアは投げ捨てられた。

「……マスターに感謝しなさい。マスターから伝言よ。帰って自分の主に伝えなさい。用があるなら自分で出向け、とね」

エセルドレーダはそう言うと言館の中へと消えていった。

「大丈夫ですか?グレイフィアさま」

「ゲホツゲホツ……ハア……ハア…… ありがとうございます様
様」

「みんなの事もあります。一旦部室へと戻りましょう」

朱乃の言葉にグレイフィアは息絶え絶えになりながら頷き、部室へと転移して行くのであった。

◇

「う、うくん。あら？ここは……」

「起きたのね？リアス」

「ご無事ですか？お嬢様」

「朱乃？グレイファイア?!どうしてグレイファイアがここにいるの？それ
にここは部室?!なんで部室に…… いや、思い出したわ。私達気絶し
てたのね」

しばらくして目を覚ましたリアスはグレイファイアがここにいる
ことに驚くも徐々に状況を把握していく。

「様するに今回はアレイにも会えず何も分からなかったと……」

「ええ、そうですわね」

「恐ろしい子だったわ。今でも身体が震えているもの。あの女の子が
いる限りアレイには合わせてもらえそうに無いわね…… だったら
いいわ。グレイファイア、アレイについて教えてくれないかしら？」

「彼についてですか……」

「なんでもいいのよ。少しでも彼の事を教えて欲しいの!」

「……それはできません」

「グレイファイア」

「できません」

「グレイファイア!!!」

「できない!できないのリアス!世の中には知らなくてもいいことがある!
知らない方が幸せなことがあるのよ!」

メイド口調を忘れ声を荒げるグレイファイアにリアスは気圧され
る。

「私は彼が恐ろしい。サーゼクスは怒るかもしれないけれど私は彼が
恐ろしくてたまらない。リアス、貴方には彼にだけは関わって欲しく
はなかった……」

「グレイファイア…… 貴方が何故そんなにもアレイを恐れているのか
は私には分からない。でもアレイはオカルト研究部の大事な仲間よ。
彼が何者であろうともそれは変わりないわ」

リアスはグレイファイアの言葉を振り払うかのように声を高々に
そう宣言した。

「……ライザー様とのレーティングゲームは一週間後に決まったわ。今はそちらに集中しなさい。応援しているわリアス」

「ありがとうねグレイフィア」

グレイフィアが冥界へと帰還するための魔法陣が現れる。

「それじゃあねリアス。一週間後に会いましょう」

——彼は……あの方はそんなにもぬるく優しい人物ではないのよ…… ——

最後にそう呟いたグレイフィアの言葉をリアスは聞こえない振りをするのであった。